



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語から見たゲルマン語(3) : 名詞の性の発達と複数形の形成
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 162, 35(左)-101(左)
Issue Date	2021-02-26
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.162.l35
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80581
Type	departmental bulletin paper
File Information	1002_bfhhs.162.l35.pdf



ドイツ語から見たゲルマン語 (3)

— 名詞の性の発達と複数形の形成 —

清水 誠

German as a Germanic Language (3)

— The Development of Gender and Plural Formation —

(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 162.

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.

Sapporo/Japan. 2021. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1. 名詞の性の発達¹

1-1. 性の簡素化— 3 性から 2 性へ

1-1-1. 男性と中性の^{きずな}絆と対立

印欧語の男・女・中の 3 性は、男性と中性に「第 3 の性」としての女性が加わって成立した (清水 2019a: 43ff.)。このことから、男性と中性には女性よりも強い結び付きがありそうな印象を受ける。実際、Duden (2009⁸: 223-248) の表でドイツ語の名詞の性の揺れを調べると、男/中性の揺れを示す例は 80 にのぼる (ド **der/das** Kehr^{ちり}richt 塵, **das/der** Barock バロック)²。一方、

¹ 本研究は清水 (2019a) (2020) の続編であり、科研費の助成による (ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述, 基盤研究 (C) (一般), 19K00540)。

男/女性の揺れは 16 例（ド **der/die** Abscheu 嫌悪），中/女性では 8 例（ド **das/die** Elastik ゴムひも・伸縮性素材），男/女/中性では 4 例（ド **der/das/(die)** Jog(h)urt ヨーグルト）にとどまる。

古ゲルマン諸語の文法性は「男・女・中」の 3 性だった。そこで，性が簡素化すると，ルーマニア語を除くロマンス諸語のように，中性が男性に融合して，「男性↔女性」（フ 男性：**le/un** livre その/ある本↔女性：**la/une** maison その/ある家）の 2 性になるとも予想される。ところが，現代ゲルマン語でそうなった例は 1 つもない。**図表 1** からわかるように，最も多い 2 性への簡素化は，男性と女性が両性に融合した「両性（uter/ラ utrum）↔中性（neuter/ラ neutrum）」である³。なぜ男性と女性が合体したのだろうか。

1-1-2. 性の表示方法—冠詞，形容詞，3 人称代名詞

そのヒントは性の表示方法にある。性を知る手立ては，第一に「派生接辞」（derivational affix）にある。たとえばドイツ語では，抽象名詞派生接尾辞 -heit/-keit は女性（ド die Wahr**heit**/Einsam**keit** 真実/孤独），動作主・道具名詞派生接尾辞 -er は男性（ド der Lehr**er**/Wecker 教師/目覚まし時計），指小

² カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア：アイスランド語，アフ：アフリカーンス語，イ：イディッシュ語，印欧：印欧祖語，英：英語，ム：北フリジア語エームラング方言，オ：オランダ語，ゲ：ゲルマン祖語，ゴ：ゴート語，古英：古英語，古高ド：古高ドイツ語，古ザ：古ザクセン語，古ス：古スウェーデン語，古フ：古フリジア語，古ノ：古ノルド語，古ラ：古ラテン語，ザ：西低地ドイツ語北低地ザクセン方言，ス：スウェーデン語，シュ：スイスドイツ語チューリヒ方言，中オ：中期オランダ語，中高ド：中高ドイツ語，デ：デンマーク語，南西英：英語南西部方言，西ゲ：西ゲルマン語，西ユ：デンマーク語西ユトランド方言，ド：ドイツ語，西フ：西フリジア語，ニュー：ノルウェー語ニューノシュク，ル：ノルド祖語，ブ：ノルウェー語ブークモール，フェ：フェーロー語，フレ：北フリジア語フェリング方言，フィン：フィンランド語，フラ：フランス語，ベル：スイスドイツ語ベルン方言，ペ：ペンシルヴェニアドイツ語，ベル：ベルギーオランダ語（南オランダ語，いわゆるフラマン語），メ：東低地ドイツ語メクレンブルク・フォアポーマン方言，ラ：ラテン語，リ：中部ドイツ語リプアーリ方言，ルク：ルクセンブルク語，ロ：ロシア語

³ 「共性，通性」は「強勢，中性」とまぎらわしいので，「両性」とする。

辞 -chen/-lein は中性 (ド das **Märchen**/Fräulein 民話/令嬢) の名詞を派生する。オランダ語では、接頭辞 be-/ge-/ont-/ver- による動詞派生名詞は、両性名詞派生接尾辞がなければ、ほとんど中性である (オ het **bezit**/**gebruik** 所有/使用)。しかし、これ以外に名詞の語形からは判別しがたい。

一方、数^{すう}は名詞に表示され、語形変化の簡素化とともにその傾向が強まる。たとえば、語形変化を簡素化した英語やオランダ語の単複同形の名詞は、ドイツ語よりもはるかに少数である。単複の区別は名詞の意味に関係する「内容指標」(ド inhaltliches Merkmal) なので、名詞自体に示す必要性が高いのに対して、意味的実体が乏しい「一致指標」(ド Kongruenzmerkmal) としての性の表示は、定冠詞などの限定詞や 3 人称の照応代名詞の語尾になされる。ドイツ語では、「男性：der Garten その庭—er それ」↔「女性：die Arbeit その労働—sie それ」↔「中性：das Gold その黄金—es (←-as) それ」となる。

冠詞が発達していないロシア語では、名詞の語末音が性を区別して、代名詞照応による一致を支えている。Garten, Arbeit, Gold と同語源の名詞の語末音をドイツ語の定冠詞と比較してみよう (ド t/g/d—ロ d/z/t)：「男性 (-子音)：gorod (горо^д) 町—on(on) それ」↔「女性 (-a)：rabota (рабо^{та}) 労働—ona (она) それ」↔「中性 (-o)：zoloto (золо^{то}) 黄金—ono (оно) それ」。

ドイツ語で女性に対する男性と中性の結び付きの強さは、(1) に示すように、次の 3 つの語形変化上の対立にある：①「定冠詞単数与/属格：男・中性 dem/des↔女性 der/der」, ②「名詞単数属格：男・中性 -(e)s↔女性 -Ø」, ③「3 人称代名詞単数与/属格：男・中性 ihm/seiner↔女性 ihr/ihrer」。

- (1) ド 男性：ワイン—それ 中性：ビール—それ 女性：牛乳—それ
- | | | |
|---------------------------------|--------------------------------|------------------------------|
| 主格 der Wein — er | das Bier — es | die Milch — sie |
| 対格 den Wein — ihn | das Bier — es | die Milch — sie |
| 与格 dem Wein — ihm | ~ dem Bier — ihm | ↔ der Milch — ihr |
| 属格 des Wein(e)s — seiner | ~ des Bier(e)s — seiner | ↔ der Milch-Ø — ihrer |

したがって、格変化が衰退すると、男性と中性の絆^{きずな}は薄れてしまうことに

なる。ロマンス諸語の多くでは、語末音 -m/-s の消失によって、ラテン語の -um に終わる中性名詞と -us に終わる男性名詞が区別できなくなり、中性が男性に取り込まれた（菅田 2019: 60）。一方、ゲルマン諸語で物を言うのは、以下で述べるように、冠詞、形容詞、3人称代名詞の語尾である。

1-2. 両性↔中性—オランダ語と西フリジア語

まず、西ゲルマン語からオランダ語と西フリジア語を検討しよう。古オランダ語では統一複数の傾向が強く、複数では性の区別が希薄だった。そこで、単数に限ると、定冠詞の前身である指示代名詞は、主/対格が「男性 *ther* ~ *thie* ~ *the* / *thana* ~ *then*」↔「女性 *thiu* ~ *thie* ~ *the* / *thia* ~ *thie*」↔「中性 *that* / *that*」の3項対立、与/属格が「男・中性 *themo* / *thes*」↔「女性 *thero* / *thero*」の2項対立だった（Quak/Van der Horst 2002: 44）。主格 *ther* は高地ドイツ語の *der* に似た語形なので除くと、-r を欠く本来の主格では、男性と女性を母音で区別していたことになる。しかし、中期オランダ語では不明確になり、主格が「両性（=男・女性）*die* / (*de*)」↔「中性 *dat* / (*t*)」の対立に変わった（Donaldson 1983: 163）。その後、主格以外の対・与・属格が失われた。そして、中期オランダ語のカッコ内の弱形が現在の定冠詞「両性 *de* [də] ↔ 中性 *het* [(ə)t]⁴（<中+*t*）」になり、「両性 *die* ↔ 中性 *dat*」が指示代名詞になった。

形容詞では、古オランダ語は強変化（不定）の主格が男・女・中性で、名詞語幹由来のゼロ語尾（-∅）だった。中期オランダ語では語形の異同が激しく、その後、定冠詞との類推で強変化（不定）は現在の「両性（=男・女性）-e ↔ 中性 -∅」（オ *een goede man/vrouw* ある良い男/女 ↔ *een goed-∅ kind* ある良い子供）に落ち着いた。弱変化（定）はすべて語尾 -e を伴う。ただし、1947年の南北共通（つまり、オランダとベルギー北部のフランドル地方に共通）の統一正書法定定（清水 2010: 234-237）までは、有生男性名詞の単数形で定冠詞と形容詞には、話し言葉では失われていた斜格語尾 -en をつけると

⁴ *het* の *h*- は人称代名詞（オ *hij/hem/haar*, 英 *he/him/her*）との類推による人為的な正書法上の添え物である（Donaldson 1983: 162f.）。

いう不自然な規範があった（オ「男性有生：bij *den* *goeden* man/aap その良い男/猿のもとで」↔「男性無生：op *de* *goede* stoel その良いいすの上で/女性：van *de* *goede* vrouw/muis その良い女/ねずみの」, Donaldson 1983: 41f., 163)。現在では、オ bij *de* *goede* man/aap だが、この規範の廃止が男性と女性の両性への融合を最終的に後押しした（Nijen Twilhaar 1992: 150）。

一方、3人称代名詞では事情が異なる。単数主格形で示すと、古オランダ語の「男性 he~hie↔女性 siu↔中性 it」（Quak/Van der Horst 2002: 43）の3性は、中期オランダ語の「男性 hi↔女性 si↔中性 het /ət/」（Van Kerckvoorde 1993: 75）に継承された。その後、斜格が捨象され、現在の「男性 hij↔女性 zij↔中性 het [ət]」に至っている。弱形の「接語」（clitic）も「中オ男性 i↔女性 se↔中性 (e)t」（ib. 76）から「男性 ie [iː]（非公式な文章でのつづり）↔女性 ze [zə]↔中性 't [t]」に引き継がれ、3性を区別する。こうして、「定冠詞・形容詞：両性・中性」↔「3人称代名詞：男・女・中性」という「ずれ」が生じることになった。

これは自然性にとっては好都合だった。ウラル語族のフィンランド語では、「彼」と「彼女」を hän と称するが、ゲルマン語では識別する必要がある（デンマーク語を始めとする北ゲルマン語では、これにならって男女共通のデ hön 「彼/彼女」（英 s/he）を広める運動が1970年代にあったが、根付いていない（Haberland 1994: 324））。そこで、オランダを中心とする北部の標準オランダ語は、「両性：de man 男—hij 彼」↔「両性：de vrouw 女—zij 彼女」↔「中性：het huis 家—het それ」として、自然性を3人称代名詞で区別する。困ったのは、文法性としての両性の処理だった。そこで、「両性：de man/dag 男/日—hij 彼/それ」↔「両性：de vrouw 女—zij 彼女」として、物事を表す両性名詞も男性形 hij に任せ、女性形 zij を自然性の「彼女」に限定したのである。完全に両性と中性の2性に簡素化した西フリジア語も、同様である（西フ「両性：de man/dei 男/日—hy 彼/それ」↔「両性：de frou 女—hja, sy 彼女」↔「中性：it hûs 家—it それ」）。両言語の「文法性」は、定冠詞の語形では「両性 de/de↔中性 het/it」だが、代名詞の照応では「男性 hij/hy↔中性 het/it」なのである（Duke 2009: 201）。

一方、ベルギー・フランドル地方を中心とする南部のオランダ語諸方言は男・女・中の3性を保っている。そこで、標準変種としてのベルギーオランダ語（南オランダ語、いわゆるフラマン語）は、文法性としての女性形 *zij*「彼女/それ」を生かして、「男性 *de—hij* 彼/それ」↔「女性 *de—zij* 彼女/それ」↔「中性 *het—het* それ」とする。「*de waarheid* 真実（接尾辞 *-heid* による抽象名詞）/*deur* ドア—*zij* それ」の照応は、ドイツ語の「*die Wahrheit/Tür—sie*」に等しい。一方、北部のオランダ語では、*zij*「それ」は書き言葉的で、普通は *hij*「それ」で受ける（オ *De democratie* is in gevaar. Maar ***hij/zij*** is nog sterk. 民主主義は（*de democratie*）危機に（*in gevaar*）ある（*is*）。しかし、それは（*hij/zij* 書き言葉的）まだ（*nog*）強い（*sterk*），清水 2019b: 83, 91）⁵。

(2) オ 両性：① 物事：*de dag/waarheid/deur* 日/真実/ドア—*hij* それ

② 人間：*de man* 男—*hij* 彼 ↔ *de vrouw* 女—*zij* 彼女

中性：*het huis* 家—*het* それ

西フ 両性：① 物事：*de dei/wierheid/doar* 日/真実/ドア—*hy* それ

② 人間：*de man* 男—*hy* 彼 ↔ *de frou* 女—*hja/sy* 彼女

中性：*it hûs* 家—*it* それ

(3) ベル 男性：*de dag* 日—*hij* それ

女性：*de waarheid/deur* 真実/ドア—*zij* それ

中性：*het huis* 家—*het* それ

ド 男性：*der Tag* 日—*er* それ

女性：*die Wahrheit/Tür* 真実/ドア—*sie* それ

中性：*das Haus* 家—*es* それ

⁵ こうした事情を配慮して、オランダ語の辞書では名詞に男・女・中性の3性を記すのが一般的である。ただし、学習用または外国人向けの辞書では、両性（*de*）・中性（*het*）の2性しか示していないことがある。

1-3. 「両性⇔中性」と「有生⇔無生」—デンマーク語, スウェーデン語; ブークモール

上記の「ずれ」は, ノルウェー語ニューノシユクを除く大陸北ゲルマン語には見られない。デンマーク語, スウェーデン語, 保守的なブークモールでは, 定冠詞, 形容詞, 3 人称代名詞のすべてで男性と女性が両性に融合した。一方, 代名詞による照応では, 指示詞標識の「h- 系列」の人称代名詞による「自然性: 男性・女性」に対して, 「d- 系列」の指示代名詞を援用して「文法性: 両性・中性」としたためである。次に, 古ノルド語 (= 古西ノルド語), 古東ノルド語から前期古スウェーデン語 (ス den äldre fornsvenskan 1225-1375, Wessén 1965: 107-120) に続いて 3 言語の単数主格の例を挙げる。

(4) 「名詞 + 後置定冠詞」—「不定冠詞・数詞 1 + 名詞」

① 男性: 魚	女性: 旅行	中性: 船
古ノ fiskr inn /n:/—einn /n:/ fiskr ferð in /n:/—ein /n/ ferð skip it —eitt skip		
古ス fiskr in /n:/—æn fiskr	färþ in /n:/—æn färþ	skip it —ët skip
② 両性: 魚	両性: 旅行	中性: 船
ブ fisk en —en fisk	ferd en —en ferd	skip et —et skip
	(ferd a — ei ferd)	
ス fisk en —en fisk	färd en —en färd	skepp et —ett skepp
デ fisk en —en fisk	færden en —en færden	skib et —et skib

(5) 「形容詞強/弱変化」—「指示代名詞/ 3 人称代名詞」

① 男性: 長い—それ	女性: 長い—それ	中性: 長い—それ
古ノ langr/lang i —sá/hann /n:/ lǫng/lang a —sú/hon langt/lang a —þat/þat		
古ス langer/lang i —þān/han /n:/ lang/lang a —þe~þōn/hōn langt/lang a —þāt		
② 両性 (有生 han 彼/hun, hon 彼女⇔無生 den それ)	中性 (無生 det それ)	
ブ lang/lange—den/han	lang/lange—den/hun	langt/lange—det
ス lång/lång a ⁶ —den/han	lång/lång a —den/hon	långt/lång a —det
デ lang/lange—den/han	lang/lange—den/hun	langt/lange—det

鍵を握るのは、①「単数主格 -r の脱落」⁷と②「子音の長短の捨象」である。①②の変化が起こる以前の古スウェーデン語では、①「名詞・形容詞：男性 *fiskr*/lang*er* ↔ 女性 *färþ-Ø*/lang-*Ø*」と②「定冠詞，不定冠詞・数詞 1：男性 -inn /n:/, *ēn* ↔ 女性 -in/n/, *ēn*」のように，男性と女性を区別していた。しかし，中期北ゲルマン語（Middle Scandinavian 1350-1550）では，①②の変化の結果，この区別が解消されて，「〔男性 ↔ 女性〕>両性（↔中性）」となった。

その背景として繰り返し指摘されるのが，1250-1500 年を中心とする北ドイツ・ハンザ同盟商人の進出に伴う中低ドイツ語の影響である。この時代に中低ドイツ語は，北海とバルト海沿岸を席卷する広域共通語—「リングワ・フランカ」(ラ *lingua franca*) —となった。スカンジナビアの主要都市に定住した北ドイツ商人は，自由な経済活動が許された地域の言語だったスウェーデン語とデンマーク語を中心に，低地ドイツ語の語彙を大量に供給した（清水 1984）。この言語接触が当時，格変化の消滅と 2 性への転換という「脱屈折化」(deflection) を加速したとする説である。

しかし，反論も絶えない（Duke 2009: 172-186）。政治的に通商が制限されたノルウェーで，ドイツ人商人の影響が最も顕著だったベルゲンの方言は，たしかにノルウェー語方言としては例外的に両性と中性の 2 性である。しかし，デンマーク語諸方言ではこの変化はそれ以前に起こっていたらしく，中低ドイツ語自身が男・女・中性の 3 性だった。同じくハンザ商人との接触が濃密だったオランダ語圏でも，2 性への簡素化は言語内部の要因によるとされている（Duke 2010: 658-661）。

さて，(5) の語形を改めてよく見ると，指示詞標識の「h- 系列」（英 *he* など）と「th/p/d- 系列」（英 *that*/ア *pað* [θa:ð]/ド *das* など）の分布が古語と現代語で異なっている。古ノ *þat*/古ス *pān*, *þat* は指示代名詞だが，それを引き継いだ現代語の *den*/*det* 「それ」(d-<þ-) は「無生—物事」を表す人称代名

⁶ スウェーデン語では，男性・人間の場合に *länge* を用いることがある。

⁷ ただし，名詞の主格複数（ス *dagar* ← *dag* 日）や動詞現在形（ス *han kommer* 彼は来る ← *komma* 来る）では，-r の復活または保持が生じた。

詞に変わっている。一方、古語で人称代名詞だった han 「彼」/hon, hun 「彼女」は、「有生—人間（ペットなどの動物を含む）」の意味に限定されている。つまり、単数では「有生↔無生」という「有生性」(animacy)に基づいて、「自然性：デ/ス/ブ 男性 han 彼↔女性 デ/ブ hun, ス hon 彼女」と「文法性：両性 den それ↔中性 det それ」という二重構造に変貌しているのである。自然性としての男・女の区別を死守しようとする工夫だったと言えるだろう（ただし、barn 「子供」など少数の中性有生名詞もある）。

- (6) デ 人間：男性 dreng 男の子—han 彼 ↔ 女性 pige 女の子—hun 彼女
物事：両性 bog 本—den それ ↔ 中性 bord 机—det それ

Drengen lagde *bogen* på *bordet*. その男の子は (drengen ← dreng)
その本を (bogen ← bog) 机の上に (på bordet ← bord) 置いた (lagde)
Han lagde *den* på *det*. 彼は (han) それを (den) その上に (på det)
置いた

- ス 人間：男性 pojke 男の子—han 彼 ↔ 女性 flicka 女の子—hon 彼女
物事：両性 bil 車—den それ ↔ 中性 tåg 列車—det それ

Jag känner *en japansk flicka*. *Hon* lär sig svenska. 私は (jag) 日本人の (japansk) 女の子を (en~flicka) 知っている (känner)。彼女は (hon) スウェーデン語を (svenska) 習っている (lär sig)
Vi har *en bil*. *Den* är så gammal. 私たちは (vi) 車を (en bil) 持っている (har)。それは (den) とても (så) 古い (är gammal)

- ブ 人間：男性 gutt 男の子—han 彼 ↔ 女性 jente 女の子—hun 彼女
物事：両性 ball ボール—den それ ↔ 中性 hus 家—det それ

Jenten/Jenta gir *gutten ballen*. その女の子は (jenten 両性形/
jenta 女性形← jente) その男の子に (gutten ← gutt) そのボールを
(ballen ← ball) あげる (gir)
Hun gir *ham den*. 彼女は (hun) 彼に (ham ← han) それを (den)
あげる

(7) 不定冠詞/後置定冠詞—3 人称代名詞 (主格)

デ 人間：男性	en/-en—han 彼	Ø/-ne—de 彼女ら
	女性 en/-en—hun 彼女	Ø/-ne—de 彼女ら
物事：両性	en/-en—den それ	Ø/-ne—de それら
	中性 et/-et—det それ	Ø/-ne—de それら
ス 人間：男性	en/-en—han 彼	Ø/-na—de 彼ら
	女性 en/-en—hon 彼女	Ø/-na—de 彼女ら
物事：両性	en/-en—den それ	Ø/-na—de それら
	中性 ett/-et—det それ	Ø/-en, -na—de それら
ブ 人間：男性 単数	en/-en—han 彼	複数 Ø/-ne—de 彼ら
	[女性 ei/-a—hun 彼女	Ø/-ne—de 彼女ら]
物事：男性	en/-en—den それ	Ø/-ne—de それら
	[女性 ei/-a—den それ	Ø/-ne—de それら]
中性	et/-et—det それ	Ø/-ne, [-a]—de それら

微妙なのはブークモールである。長らくノルウェーの公用語だったデンマーク語の伝統に対して、ノルウェー語の独自性を意識した革新的なブークモールは、ニューノシュクと同じく女性を加えた男・女・中性の3性である。不定冠詞(en/ei/et)と定冠詞単数(-en/-a/-et)には、(8)のフェーロー語と同じく3種類ある。ノルウェー語諸方言では、フェーロー語に見られる女性形の不定冠詞 ein/定冠詞単数 -in の -n が脱落し、-i が -a に低舌化して ei/-a となって、男性形 en/-en との対立が保持された(Haugen 1982: 75)。一方、デンマーク語の伝統を踏襲する保守的なブークモールは、デンマーク語と同じく両・中性の2性で、不定冠詞(en/et)も定冠詞単数(-en/-et)もデンマーク語と同じ2種類である。20世紀初頭以来、最大の懸案だった女性名詞(不定冠詞 ei/定冠詞単数 -a/所有代名詞単数 mi 私の)の使用は、2005年の言語改革以来、約650語で自由になった。伝統的な「両性：**en** bok ある本—**boken** その本—**boken min/min** bok 私の本」と並んで、「女性：**ei** bok—**boka**—**boka mi/mi** bok」も使用可能になったのである。ただし、***boka**

min/**boken mi* という混合した使い方は許されない。

1-4. 男性↔女性↔中性—アイスランド語, フェーロー語, ニューノシュク

一方, 3性を保つ北ゲルマン語のアイスランド語, フェーロー語, ニューノシュクでは, 代名詞照応はドイツ語と同じく文法性に対応してなされる(中性—人間の例は割愛, ア/フ₁は主格)。

(8) 男性: 人間: ア strákur/フ₁ drongur/ニ₁ gut 男の子—ア・フ₁ hann 彼/ニ₁ han 彼

物事: ニ₁ ball/フ₁ boltur/ア bolti ボール—ア・フ₁ hann/ニ₁ han それ

女性: 人間: ア stelpa 女の子/フ₁ genta/ニ₁ jente —ア hún/フ₁ hon/ニ₁ ho 彼女

物事: ア bolti ボール/フ₁ boltur/ニ₁ ball —ア・フ₁ hann/ニ₁ han それ

中性: 物事: ア・フ₁ hús 家/ニ₁ hus —ア það/フ₁ tað/ニ₁ det それ

(9) 不定冠詞/後置定冠詞—3人称代名詞

ア	男性	単数: Ø/-inn—hann	複数: Ø/-inir—þeir
	女性	Ø/-in—hún	Ø/-inar—þær
	中性	Ø/-ið—það	Ø/-in—þau
フ ₁	男性	ein/-in—hann	einir/-inir—teir
	女性	ein/-in—hon	einir/-inar—tær
	中性	eitt/-ið—tað	eini/-ini—tey
ニ ₁	男性	en/-en—han	Ø/-ne—dei
	女性	ei/-a—ho	Ø/-ne—dei
	中性	et/-et—det	Ø/-a—dei

ニューノシュクは複数で定冠詞が「両性 (男・女性)↔中性」の対立だが,

3 人称代名詞は統一複数に変わっている。一方、アイスランド語とフェーロー語は複数でも 3 性を保っているが、性が異なる 2 つの名詞を受ける場合には、規則的に中性形で受ける。たとえば、アイスランド語の X eru hjón.「X は夫婦 (hjón) です (eru)」では、中性の þau は普通のパターン、男性の þeir は男性どうし、女性の þær は女性どうしのカップルを代弁する。

- (10) ア *Sigurður og Helga* eru hér.—*Þau* eru hér. シーグルズル (男名) と (og) ヘルガ (女名) はここに (hér) います (eru)—彼(女)らは (þau 中性複数) ここにいます (清水 1989 : 43 変更)
- Skólinn og sjúkrahúsið* eru hér.—*Þau* eru hér. 学校 (skólinn 男性単数← skóli) と病院 (sjúkrahúsið 中性単数← sjúkrahús) はここにあります—それらは (þau 中性複数) ここにあります (ib. 43 変更)

一方、次のフェーロー語の例では、不定・疑問代名詞の中性複数対格 *nøkur*「だれか」/*hvørji*「だれ」に対して、同じく人間の意味を表す単数では、男性形 *nakran*「だれか」/*hvønn*「だれ」を使っている。中性形 *okkurt*/*hvat* だと、「何か」/「何」という物事の意味を表す。

- (11) フェ *Sást tú **nøkur/nakran** í dansinum í gjár?* 君は (tú) 昨日 (í gjár), ダンスで (í dansinum) だれかに (*nøkur* 中性複数対格/*nakran* 男性単数対格) 会ったのかい (*sást*) (Petersen/Adams 2009²: 13f.)
- Hvørji/Hvønn* *sást tú í dansinum í gjár?* 君は昨日, ダンスでだれに (*hvørji* 中性複数対格/*hvønn* 男性単数対格) 会ったのかい (ib. 13f.)

何か違和感はないだろうか。異なる性の名詞を中性複数形の代名詞で受けるのは、古ゲルマン諸語に共通の現象である。ただし、形容詞を含めてこの中性複数形 (ゴ -a) は、印欧祖語の男性双数形 (印欧 *-ō) に由来し、2 つの

名詞以外に一般化された結果なのである (Streitberg 1920^{5/6}: 166)。「双数」(dual)とは「2人, 2つ」を表す範疇で、アイスランド語とフェーロー語の1/2人称代名詞複数形 *við/vit*「私たち」, *þið/tit*「君たち」は双数形の転用である (*-ð/-t* は数詞「2」(英 *two*) に由来する)。

ところが、古高ドイツ語では「有生名詞—代名詞男性形」↔「無生名詞—代名詞中性形」という照応上の傾向があり、一般的な意味やラテン語原典が主語代名詞を欠く場合には、男性形が基本だった。定冠詞(ないし指示代名詞)/3人称代名詞(主格)が複数形で「男・女性 *die/sie*」↔「中性 *diu/siu*」に簡素化した中高ドイツ語では、男・女性形が中性形を代用する傾向が強まる。これはかつての規則が崩れつつあった過程である。このからくりを解いたのは、ノルウェーのゲルマン語学者アスケダール (John Ole Askedal) だった (Askedal 1973: 187-193)。フェーロー語の不定代名詞中性複数形は以前のなごりであり、男性単数形は本来の「無標」(unmarked)の語形なのである。

1-5. 男性↔非男性—北フリジア語フェリング方言・エームラング方言

風変わりな2性への簡素化の例に、北フリジア語島方言のフェリング方言 (フ₁ *fering*) とエームラング方言 (ム₁ *öömrang*) の「男性↔非男性」がある。両者は類似性が高いため、以下ではフェリング方言の例で説明する。

非男性とは中性と女性ที่融合し、女性が中性に取り込まれたことを意味する。中性が女性を体系的に吸収した例は、ゲルマン諸語では類を見ない。1-2で紹介したオランダ語と西フリジア語の3人称代名詞「男性: オ *hij*/西 *hy*↔中性: オ *het*/西 *it*」は、男性が文法性としての女性を吸収したので異質である。

フェリング方言の定冠詞には、指示性を欠く「A-定冠詞(母音定冠詞)」と指示性を残す「D-定冠詞」の2種類がある。これは、現代ゲルマン諸語として非常にユニークである。定冠詞 (フ₁ *at/det* (<古フ *thet*)) と人称代名詞 (フ₁ *hat* <古フ *hit*) は、20世紀に女性形の定冠詞 *jü* (< *djü* <古フ *thiu*) と人称代名詞 *jü* (<古フ *hiu*) に代わった中性形である (Hoekstra 1996: 49)。英 *that*/オ *dat*/ス *det* と同じく、*hat* の語末音 *-t* が中性単数の目印である。

- (12) フェリ 単数： 定冠詞—人称代名詞 複数：定冠詞—人称代名詞
 男性 **a/de** maan/dai 男/日 **a/dön** maaner/daar—jo
 —男性 hi 彼/それ
 非男性 **at/det** bridj/nocht 花嫁/夜 **a/dön** bridjen/nochter—jo
 —女性 hat 彼女/それ
at/det hüs 家—中性 at それ **a/dön** bridjen/hüsing—jo

「男性⇔非男性」への簡素化には、次の要因が考えられる。そもそも中性による女性の個々の代用例は、西ゲルマン語では珍しくなく、ヘッセン方言、ヴェストファーレン方言、低地ライン方言に散見される（Århammar 1971/75: 55f.）。中部ドイツ語リプアーリ方言（ド Ripuarisch）とルクセンブルク語でも、女名は中性扱いである（リ **et** Tring トリング（女名，et 定冠詞中性），ル **eist** An うちのアン（eist 所有代名詞中性← eis 私たちの），Newton 1990: 169）。西フリジア語も「男名+指小辞 -tsje/-je/-ke」による中性の女名が豊富である（西フ **Jantsje** ヨンチェ/Saakje サークエ/Klaske クラスケ（女名）← Jan ヨン/Sake サーク/Klaas クラース（男名），清水 2006: 126）。ルクセンブルク語では、人称代名詞女性形 si 「彼女」の代わりに、中性形 hatt を親しみを込めて使う。フェリ hat 「彼女」はこれと似ている。

- (13) ル **D’Claudine** ass krank. **Hatt** geet bei den Dokter. クラウディーネ（定冠詞 d’+女名）は病気です（as krank）。彼女は（hatt 中性⇔si 女性⇔hien 男性）医者に（bei den Dokter）行きます（geet）
 （Braun et al. 2005: 116）

フェリ An **Göntje**? Wenet **hat** uun Madlem? それで（an）ゲンチェ（Göntje 女名）は？ 彼女は（hat 女性⇔at 中性⇔hi 男性）マドレムに（uun Madlem）住んでいるの（wenet）？（Arfsten/Tadsen 2007: 変更）

ただし、フェリング方言の hat は自然性としての女性形である。3性を保つ大陸方言のモーリング方言では、hat は有生名詞（⇔無生 dāt）に使う中性

形であるし、島方言のセルリング方言の中性形 *hat* も小さな女の子に使う(清水 1992: 99, 144)。また、同じく島方言に属するヘルゴラント島のハルンデ方言は、両性(定冠詞 *de*)と中性(定冠詞 *deät*)の2性だが、中性名詞には女性の人間を表す名詞がかなり含まれている(ハル *deät Doam* 婦人/Söster 姉妹/Oolsk 老婆/Itbringer ウエイトレス ↔ ド *die Dame/Schwester/alte Dame/Kellnerin*, Borchert/Århammar/Århammar 1987: 85)。

中性による女性表現は、軽蔑・哀れみ・愛着などの感情をよく伴う(中性: ド *das* Mensch/西フ *it* minske あばずれ女 (↔ 男性: *der* Mensch/*de* minske 人間)。モーリング方言では、小さいものや軽蔑的なものを表す場合には、男性または女性名詞を中性に変えることがある。また、接尾辞 *-rai* (ド *-rei*) を伴って軽蔑的行為を表す名詞は、場所・職業を表す場合の女性名詞と違って、中性である(ドイツ語ではともに女性)。

- (14) モ 中性 *dät hün* 子犬 ← 男性 *di hün* 犬
 dät mansch(e) 奴, 娼婦 ← 男性 *di mansch(e)* 人間
 dät wüset あま ← 女性 *jü wüset* 女
 dät tiüwerai 盗み ↔ 女性 *jü brauerai* (ビール)醸造業(所)
 (ド 女性 *die Dieberei* ~ *die Bräuerai*) (清水 1992: 89f.)

感情的含みは、第一に人間に向けられる。フェリング方言の中性形 *det/hat* は、19世紀には認められていた感情的意味を弱め、物事にも一般化されて、人称代名詞女性形 *jü* (<古フ *hiu*)、ついで同形の定冠詞女性形 *jü* (<古フ *thiu*) を駆逐したと考えられる(Hoekstra 1996: 55f., 2001: 777)。

それに拍車を掛けたのが、おそらく対格由来の形容詞男性単数語尾 *-en* (清水 1992: 142f.) の保持だったと、Hoekstra (1996: 63) は推定している(フリ男性 *en smoken* maan あるハンサムな男 ↔ 非男性 (<女性/中性) *en letj-Ø* bridj/hüs ある美しい花嫁/家)。男性専用語尾 *-en* を失ったセルリング方言とハルンデ方言は、「両性 ↔ 中性」になっている⁸。1-2 で述べたオランダ語のかつての男性形語尾 *-en* も参照されたい。北フリジア語に大きな影響を与

え続けてきた低地ドイツ語北低地ザクセン方言でも、単数男性対格語尾 -en は、ゼロ語尾の主格との区別を保つ唯一の指標である（ザ 定冠詞単数：「男性主格 de ー対格 den」↔「女性主・対格 de」/「中性主・対格 dat」）。

1-6. 可算↔不可算—デンマーク語西ユトランド方言

最後に、「両性↔中性」から個体を表す「可算」（デ numerale）と質量・素材・概念を表す「不可算」（デ innumerales）の意味的対立に転じたデンマーク語西ユトランド方言（デ vestjysk）を紹介しよう。西¹ æ/den hus は英 the/that house, 西¹ æ/den luft は英 the/that air にあたる。標準デンマーク語と違って、定冠詞は西ゲルマン語と同じ前置定冠詞 æ を用いる（**図表 2** 参照, Nielsen 1959: 44-46）。den（可算）/det（不可算）は指示代名詞である。

(15) 西¹ ① **æ/den** hus/træ/skilt その家/木/看板—**den** それ（可算）

↔**æ/det** luft/jord/mælk/skrig⁹ その空気/大地/牛乳/叫び—**det** それ（不可算）

② **den fisk** a fanget i søndags 私が (a) この前の日曜日に (i søndags) 手に入れた (a fanget) 魚 (den fisk 可算・個体)

↔A fik al **det fisk** a ku spis. 私は (a) 私が食べられる (a ku spis) すべての (al) 魚を (det fisk 不可算・量) 手に入れた (fik)

③ **Æ egetræ** i wor haw **den** er stor. 私たちの庭の (i wor hav) 榿の木 (æ egetræ 定冠詞+名詞), あれは (den 可算・個体) 大きい (er stor)

↔**Egetræ det** er bedst til møbler. 榿の木 (egetræ), あれは (det

⁸ セルリング方言では中性（定冠詞単数、以下同様 dit）が両性（di）に取り込まれ、「統一性」（ド Einheitsgenus）になる傾向があったが、近年ではドイツ語の影響で中性（dit）が復活している（Århammar 1975: 8, Walker/Wilts 2001: 289）。なお、フェリング方言には、親族名・身体名・装身具を含む譲渡不可能名詞、家庭内日用品名詞、抽象名詞にかつての女性名詞の片鱗が見られる（Ebert 1998）。

⁹ Ringaard (1973: 31) の原文には det skrigen とある。

不可算・概念) 家具に (til møbler) 最適だ (er bedst)

(以上, 清水(訳) 1995: 64 一部変更)

定冠詞は æ の 1 種類で, 指示代名詞が限定用法・独立用法ともに「可算 den↔不可算 det」を区別している。②③は同じ名詞に意味に応じて使い分ける例である。標準デンマーク語では, ①「両性 -en: skilten 看板/luften 空気/jorden 大地/mælken 牛乳—**den** それ」↔「中性 -et: huset 家/træet 木/skriget 叫び—**det** それ」となる。②③も一貫して「両性: fisken 魚—**den** それ」↔「中性: egetræet 櫨の木—**det** それ」となる。このように, 西ユトランド方言では, 恣意的な「両性↔中性」から「可算↔不可算」という意味的対立に変わっている。これは文法性の転換ではなく, 名詞自体の性は失われており, 指示代名詞 den/det が「(両性の) それ」/「(中性の) それ」という文法性による一致から開放されて, 「(可算の) それ」/「(不可算の) それ」という指示代名詞自体の意味を獲得したとみなすことができる。

「両性: 個体」↔「中性: 質量・素材・概念」という意味的区別は, 北海沿岸のゲルマン諸語に散見される現象である。(16) のブークモールとデンマーク語①の例は, 本来, 「ビール, 水」という意味の中性名詞 (ブ・デ øl/デ vand) を「1 本・1 杯の」の意味で, 不定冠詞または数詞「1」を添えて両性扱いする場合である。逆に, デンマーク語②の例は, 本来, 「牛乳」の意味の両性名詞 (デ mælk) を分割不可能な素材の意味で中性扱いする場合である。

- (16) ブ Jeg fikk **ølen** ... og tok en ny slurk av **ølet**. 私は (jeg) ビール (の瓶) を (ølen, -en 定冠詞両性) 手に取り (fikk), そして (og) ビール (ølet, -et 定冠詞中性) をまた一口飲んだ (= から (av) 新たな一飲みを (en ny slurk) 取った (tok)) (Faarlund et al. 2002³: 158)

デ ① øllet/vandet ビール/水 (-et 定冠詞中性)

↔ **en** øl/vand 1 杯・本のビール/水 (en 不定冠詞両性)

(Lundskær-Nielsen/Holmes 2010²: 21)

- ② Har du drukket **den mælk**? 君は (du) その牛乳を (den mælk

←den 指示代名詞両性) 飲んだのかい (har~drukket)

↔Tør **det Mælk** op. その牛乳を (det mælk←det 指示代名詞中性) 拭きなさい (tør~op) (Diderichsen 1976³: 92)

逆に, (17) は両性名詞を質量・素材・概念 (または制度) の意味で中性扱いするオランダ語の例である。同じ名詞を意味に応じて, 両性と中性に使い分ける例もある。

(17) オ Is **de tandpasta** al op?—Ja, **het** is op. 歯磨きは (de tandpasta, de 定冠詞両性) もう (al) ないの (is~op)?—うん (ja), それは (het 人称代名詞中性) ないよ (is op)

↔Is **de tube tandpasta** leeg?—Ja, **hij** is leeg. 歯磨きのチューブは (de tube tandpasta, de 定冠詞両性) 空なの (is~leeg)?—うん, それは (hij 人称代名詞男性) 空だよ (is leeg)

(Donaldson 1997: 62)

de diamant/voetbal ダイヤ (宝石)/サッカーボール (de 定冠詞両性) ↔**het** diamant/voetbal ダイヤ (原石)/サッカー競技 (het 定冠詞中性)

北ゲルマン語では, 叙述用法の形容詞が「連結動詞」(コピュラ copula) で結ばれた主語と性・数で一致する¹⁰。ところが, (18)①のブークモールの例では, 主語名詞複数が無冠詞不定形で概念を表すと, 形容詞がデフォルト形の中性単数で現れ, 一致しない。一方, 定冠詞を伴うと, 個体の意味が強まって一致する。ただし, ③のスウェーデン語の例では, 定冠詞を伴っても概念を表す場合には一致しない。定・不定の制約が比較的弱いと思われる。

(18) ① ブ **Pannekaker**/***Pannekakerne** er **godt**. パンケーキというもの

¹⁰ ドイツ語の叙述用法の形容詞も, 16 世紀以前は主語の性・数と一致していた。

- (pannekaker 複数・不定←pannekake)/そのパンケーキ (pannekakerne 複数・定: -ne 定冠詞複数) はおいしい (godt 中性単数←god) (Enger 2003: 81, Duke 2009: 140)
- ② ス *Rosor*/**Rosorna* är *vackert*. バラというもの (rosor 複数・不定←ros)/そのバラ (rosorna 複数・定: -na 定冠詞複数) は美しい (vackert 中性単数←vacker 美しい) (Kusmenko 2000: 475)
- ③ ス *Taxin* blev *dyrt*. タクシー (料金) は (taxin 両性単数・定←taxi + -n (←-en) 定冠詞両性) 高く (dyrt 中性単数←dyr 高価な) なった (blev) (Enger 2003: 97)

英語のイギリス南西部方言でも, a tool/tree 「道具/木」などの個体名詞は he または she, water/dust 「水/^{ちり}塵」などの物質名詞は it で受ける (Wright 1905: 266, Paddock 1991: 31-35, Siemund 2013: 45-63)。(19) も同様である。

- (19) 南西英 Pass *the loaf* — *He's* over there. そのパンを取って—それは (he 可算・個体) そこにあるから (Trudgill 1999²: 94f.)
I like *this bread* — *It's* very tasty. 私はこのパンが好きだ—それは (it 不可算・種類) とてもおいしい (ib. 94f.)

北フリジア語ハルンデ方言でも, 3人称代名詞単数の中性形 deät 「それ」は物質名詞と抽象名詞との照応に使い, 物事を表す可算名詞を受けるときには両性形 hi 「それ」を援用する (Borchert/Århammar/Århammar 1987: 90)。

ドイツ語では, 特定の名詞と無縁の「形容詞の名詞化」の場合に, 男・女性が人間 (ド der/die Alte その高齢の男/女), 中性が物事 (ド das Alte その古いもの) の意味を担う。両性と中性に簡素化したデンマーク語でも, 不定代名詞 nogen/ingen (両性) 「だれか/だれも (～ない)」は人間, noget/intet (中性) 「何か/何も (～ない)」は物事を表す。一方, 指示代名詞 den (両性) ↔ det (中性) 「それ」は物事の意味だが (↔ 人称代名詞・人間: han 彼/hun 彼女, 1-3(7)参照), 特定の名詞を指さない用法では, 「den 具体的対象 ↔ det 事

柄・状況」と使い分ける (デ *Den* er fin. それはすばらしい (ものだ) ↔ *Det* er godt. それは良い (ことだ) ; Tag *den* med ro. それ (= 具体的対象) をあわてするな (落ち着いてやれ) ↔ Tag *det* med ro. あせるな (それ (= 状況) をあわてるな)。デンマークの言語学者ディーゼリクセン (Paul Diderichsen 1905-1964) は、デンマーク語には恣意的に「固定された性」(デ fast genus) のほかに、上記の意味的に動機づけられた「自由な性」(デ frit genus) があると述べている (Diderichsen 1976³: 91-93)。西ユトランド方言では、この「自由な性」が「可算 ↔ 不可算」の対立に結びついたと考えられる。

北海沿岸のゲルマン諸語には、文法性の簡素化を被った例が少なくない。とくにユトランド半島は、南側に西ゲルマン語の低地ドイツ語圏に加えて北フリジア語圏が控え、5世紀にはジュート人 (Jutes) がブリテン島に渡って古英語の一角を担うなど、言語接触が濃密な地域である。その中央には、**図表2, 3**に示すように、前置・後置を分ける定冠詞境界線が走っている。デンマーク語圏は、島方言の男・女・中の3性、ユトランド半島東部の両・中の2性に対して、同半島西部の可算・不可算の意味的対立という3地域に大別される。広範な言語接触の中で大きな構造変革を被った西ユトランド方言は、名詞の文法性消失を被り、その残照として、北海周辺のゲルマン諸語に共通の上記の意味的特徴を顕在化させたと言えるだろう¹¹。

2. 複数形と名詞の語幹

2-1. ドイツ語の複数形—なぜこれほど複雑なのか

2-1-1. ドイツ語の複数形語尾 -s

英語からドイツ語に入ると、名詞の複数形が複雑な事実には戸惑う。ゼロ語尾 (-Ø/-:Ø) 型 (ド Wagen—Wagen-Ø 車, Apfel—Äpfel-Ø りんご), -e/-e 型

¹¹ Kusmenko (2000: 474-476) はドイツ語の形容詞名詞用法中性形が表す「+抽象的, -有生」(ド + abstrakt, - belebt) という意味的指標 (Werner 1973: 50) を西ユトランド方言を始めとする諸言語の (15)~(18) の例の要因とみなしているが、両性との意味的対立という視点を欠いている。

(ド Tag—Tage 日, Gast—*Gäste* 客), -er 型 (ド Lamm—*Lämmer* 子羊), -en 型 (ド Frau—Frau*en* 女, Zunge—Zungen*n* 舌), -s 型 (ド Hobby—Hobby*s* 趣味) に分かれ, ウムラウト (¨) の有無も厄介である。高地ドイツ語諸方言をちょうかん鳥瞰すると, -e/-e 型は男性, -er 型は中性, -en 型は女性と男(・中)性弱変化, ゼロ語尾 (-Ø/-Ø) 型は男・女・中性に多く見られるが (Dingeldein 1983), 大まかな目安にすぎない。英語にも foot—*feet*-Ø「足」(ド Fuß—*Füße*), ox—ox*en*「雄牛」(ド Ochse—Ochse*n*) などの例はあるが, ごくわずかである。こうした不規則性は, 歴史言語学的要因に基づくことが推測される。

そもそも, 2-2-4 で述べるように, 複数形語尾 -s が支配的な現代ゲルマン語は英語だけである。逆に, ドイツ語の語尾 -s は外来語や略語専用 (ド Hobby*s* 趣味, CD*s* CD) で, 新語での生産性は高くても, 本来の語彙には使わない。スイスドイツ語チューリヒ方言には語尾 -s がなく, 外来語の複数形はゼロ語尾 (チュ Hobby—Hobby-Ø) である。後述するように, 複数形の -s はゲルマン祖語にはあったのだが, 古高ドイツ語には残らず, スイスドイツ語が属する上部ドイツ語では稀である。一方, 古英語と同じく北海ゲルマン語の仲間だった古ザクセン語 (= 古低ドイツ語) では保たれ, 中低ドイツ語では人間名詞に残った。そこから南下して中部ドイツ語に入り, 英語やフランス語からの外来語に定着した (Tiesema 1969²: 88, Dingeldein 1983: 1199)。

2-1-2. 語尾 -s と独立属格—*Buddenbrooks* 『ブッデンプローク家の人々』

ただし, 北ドイツ出身の文豪トーマス・マン (Thomas Mann 1875-1955) のノーベル賞受賞作 *Buddenbrooks* 『ブッデンプローク家の人々』(1901) の -s は, 単数属格語尾である。スイスドイツ語チューリヒ方言の *s* Chällers 「ヘッレルさん一家 (の)」も同様である。標準ドイツ語では *des* Kellers 「ケラーさん一家 (の)」が対応するが, この語形はチューリヒ方言では人名も定冠詞を伴うことによる (Weber 1987³: 210)。ド *Die* Buddenbrooks のように定冠詞複数形 *die* をつけたり, チュ *S Chällers* händ nämli vier Chind. 「ヘッレルさん一家にはつまり 4 人子供がいます」(Beilstein-Schauvelberger 2007²: 75 変更) の定動詞 *händ* (← *haa* 持っている) が複数形になるのは, 「ブッデ

ンブロック家の人々」「ヘッレルさん一家の人々」のように、「人々」の意味の複数形名詞を補って解釈しているためである。

スウェーデン語の Larssons「ラーションさん一家」にも共通のこの表現は、「独立属格」(absolute genitive)と呼ばれ、住居名(英 at my uncle's 私の叔父の[家]で)、店舗・会社名(西 by de bakkers パン屋(bakker)の[店]で、清水 2006: 117)にも見られる。これは英語の This is *my hat* and that is *my father's*。「これが私の帽子で、あれが父の[帽子]です」のような後続名詞の省略ではない。オランダの英語学者クライシンハ(Etsko Kruisinga 1875-1944)は、I have been spending a fortnight *at my {uncle's/uncle's villa}*。では、at my uncle's は発話者が叔父の別荘に泊めてもらったのに対して、at my uncle's villa は叔父が発話者に別荘を貸した意味になり、明確に異なると的確に述べている(Kruisinga 1932⁵: 64)。ロンドンの保険市場 Lloyd's「ロイズ」も、もはや17世紀末の喫茶店 Lloyd's Coffee House ではない。

2-2. 複数形語尾と名詞の語幹—複数形は単数形である

2-2-1. 語尾 -er の意味するもの—語根、語幹形成接尾辞、語尾

さて、上記のチューリヒ方言の例では、複数形 vier Chind-Ø「4人の子供たち」はゼロ語尾である。ドイツ語の Kinder (← Kind 子供)には語尾 -er がつき、英語、オランダ語、アフリカーンス語では「子供たち」(子+ども+たち)のように、英 child^{ren} (-r + -en)/オ kinder^{en} (-er + -en)/77 kinders (-er + -s)の「二重複数」(double plural)になるのに、奇妙ではないだろうか。

じつは、中高ドイツ語期までは、Kind の複数形は他の中性名詞の多くと同じくゼロ語尾だった(中高ド kint—kint-Ø)。その後、^{すう}数を名詞の語形に表示する必要性から、スイスドイツ語の一部を除いて(Dingeldein 1983: 1199)、語尾 -er をよそから拝借したのである。その大本が Kalb—^{おおもと}Kälber「子牛」/Blatt—Blätter「葉」など一部の中性名詞に古くから固有の -er だった。a > ä [ɛ] のウムラウトは、-er [ɐ] が古高ドイツ語で -ir だった証拠である。a は後続音節の i の [+前舌高舌音]という素性を吸収して、ä(/ɛ)になった。ところが、この -er は本来、複数とは無縁の接尾辞だったのである。

この謎を解く鍵は、古形を保つ地名に潜んでいる。ドイツ中・南部の小さな地名に、Kälbersbach「ケルバースバハ」、Blättersbach「ブレタースバハ」がある。「{子牛/葉っぱ}の小川」の意味だが、Kälbers-/Blätters-はKalb「子牛」/Blatt「葉」の複数形 Kälber/Blätter ではなく、属格語尾 -s を伴う単数形に由来するのである (Braune/Reiffenstein 2004¹⁵: 188, Mettke 1983: 142, Tiesema 1969²: 75)。古高ドイツ語では Kelbirisbach, Pletirspah(c) となるが、当時、複合語 Liebesbrief「ラブレター」(Liebe 愛 + -s- + Brief 手紙) の「接合要素」(linking element) としての -s は未発達だった。名詞句全体に添える英 men's wear「紳士服」の所有格 -s とも別物である。

両者の前半は、kelb-*ir*-is-/plet-*ir*-s- の構成である。意味の中心である「語根」(root) の kelb-/plet- (>kelb-/plet- (blat の上部ドイツ語形) のウムラウト形¹²) と属格単数の「語尾」(ending) にあたる -is- (>ド-(e)s-) との間に、-ir- (>ド-er-) がはさまっている。これは「語幹形成接尾辞」(ド stamm-bildendes Suffix) と呼ばれ、直前の語根と合わせて「語幹」(stem) を形作っていた。一般に現代語の単語は「語幹 + 語尾」の 2 部構成だが、古語では「語根 + 語幹形成要素」で語幹になり、語尾が加わる 3 部構成だったのである。

(20) 現代語：ド 単数属格 Kalb-(e)s-/Blatt-(e)s-

語幹 Kalb-/Blatt- + 語尾 -(e)s

古語：古高ド 単数属格 kelb-ir-is-/plet-ir-s-

語幹 [= 語根 kalb-/plat- + 語幹形成接尾辞 -ir-] + 語尾 -is/-s

語幹形成接尾辞には、3-1 で述べるように、ゲルマン語には 8 種類ある。ゲルマン祖語から「ロータシズム」(rhotacism) で「ド-r < ゲ *-z /z/」となった -ir- を伴う「ir- 語幹」もその 1 つで、正式には「iz-/az- 語幹」(iz-/az-stem)¹³

¹² 古高ドイツ語期以前に起こった「第一次ウムラウト」(ド Primärumlaut, a > e/_i) では、ä の代わりに古高ドイツ語では e とつづる。現代語の一部もそうである。

¹³ ゲルマン祖語の *-iz /z/ (>古高ド -ir >ド-er) の母音交替による *-az を加えて、「iz-/az- 語幹」と呼び、印欧祖語の「s- 語幹」(es-/os- 語幹) にさかのぼる。

と言う。iz-/az- 語幹を持つ名詞が「iz-/az- 語幹名詞」である。kelb-**ir**-is-/plet-**ir**-s- は単数属格形「子牛の/葉っぱの」だったが、語幹形成要素 -ir は後代に複数形 Käl**ber**/Blät**ter** の語尾 -er に再分析された。ドイツ語では、大昔の種々の語幹形成接尾辞が複数形語尾に受け継がれているのである。

ということは、現代語の単数形 Kalb/Blatt にあたるのは語根の kalb-/plat- であって、複数形 Kälber/Blätter に相当するのは「単数形語幹」の kelb-ir-/plet-ir であることになる。つまり、古くは単数形だったわけで、「複数形は単数形である」というパラドクスが成り立つのである（清水 2012a: 87-92）。

2-2-2. 名詞語幹の種類と語幹形成接尾辞の摩滅

ゲルマン祖語にはたとえば次の語幹があり、ある程度は性の区別と対応していた。①～③は母音語幹，④～⑤は子音語幹である。次に、「単数—複数」の順で代表的な例を挙げる¹⁴。たとえば，(21) ①ゲ **daʒaz* (ト Tag—Tage) 「日」では，**daʒ-* (語根) と *-z* (単数主格語尾) の間の *-a-* が語幹形成接尾辞で，*a-* 語幹であることを示す。詳細は 3-1 でまとめて説明する。カッコ [] をつけた語形は，後述のとおり，他の語幹との類推による。ゲルマン祖語の推定形は単数主格 (中性名詞は主・対格) である¹⁵。

- (21) ① *a-* 語幹 (男・中性) > *-e*/[*-e*] 型/ゼロ語尾 (*-Ø*/[*-Ø*]) 型: 男性 Tag — Tage 日 (<古高ト tag — taga/tagā <ゲ **daʒaz*); 中性 Wort — [Worte/Wörter] 言葉 (<古高ト wort — wort, ゴ waúrd — waúrdā <ゲ **wurðan*)
- ② *ō-* 語幹¹⁶ (女性) ✕ [*-en* 型]¹⁷: Gabe — [Gaben] 贈り物 (<古高ト

¹⁴ 資料的制限のある古語の語形変化表に選ばれる語は，聖書関係の文献に登場する語彙を中心にほぼ決まっており，語形は代表的なものにとどめる。以下同様。

¹⁵ ゲルマン祖語の推定形は Orel (2003) に従い，Kroonen (2013) も考慮している。ʒ/ʎ/, x/x/, d/ð/, b/B/, 語末の -n/ⁿ/ に注意。

¹⁶ *ō-* 語幹は母音語幹 (= 幹母音語幹 thematic stem) ではなく，印欧祖語で喉頭音 **h₂* に終わる語幹に直接，語尾をつけた「非幹母音語幹」(athematic stem) とみなすことが多く

geba — gebā, 𐌵 giba — gibōs <ゲ *gebō)

- ③ i-語幹 (男・女性, 中性は少数, ウムラウトを伴う) > ē 型/ゼロ語尾 (∅) 型: 男性 Gast — **Gäste** 客 (<古高ド gast — gesti <ゲ *gastiz); 女性 Kraft — **Kräfte** 力 (<古高ド kraft — krefti <ゲ *kraftiz/*kraftuz)
- ④ iz-/az-語幹 (> ir-語幹: 中性のみ, ウムラウトを伴う) > er 型: Lamm — **Lämmer** 子羊 (<古高ド lamb — lembir <ゲ *lambiz/*lambaz)
- ⑤ n-語幹 (弱変化, 男・女・中性) > -en 型 (男性弱変化名詞を含む): 男性 Bote — Boten 使者 (<古高ド boto — boton <ゲ *budōn) 女性 Zunge — Zungen (<古高ド zunga — zungūn <ゲ *tunzōn) 中性 Herz-Herzen (<古高ド herza — herzun <ゲ *xertōn)

かつての語幹の特定は容易ではない。その原因の1つは、語幹形成接尾辞と語尾の摩滅である¹⁸。たとえば、① a-語幹中性の古高ド wort — wort-∅「言葉」(ゴ waúrd — waúrda, 2-3-2(25)参照)では、語末音脱落による単複同形を解消するために、複数形が①の男性-e型による Worte と④の er 型による Wörter に移った。第2の原因は、語幹の移行と異なる語幹の併存である。① a-語幹男性名詞 Nagel — Nägel-∅^{くき つめ}「釘, 爪」(ゲ *nazlaz) には、古高ドイツ語で a-/i-語幹の nagel/negil があり (Orel 2003: 279), ウムラウトを伴うゼロ語尾 (∅) 型に落ち着いた。② ö-語幹は, Gabe — Gaben「贈り物」のように、⑤ n-語幹由来の -en 型に移行した。

語幹の母音を最も良くとどめているのは、ゴート語の複数与格である (ゴ ① waúrdam 言葉, ② gibōm 贈り物)。フィンランド語への借用語 kuningas「王」は、a-語幹の語幹形成要素 -a- と単数主格語尾 -s も保存している。

なっている (Fulk 2018: 142)。

¹⁷ ö-語幹女性名詞の複数形 -en 型は、2-3-4 で述べるように⑤ n-語幹との類推による。

¹⁸ 無強勢母音が e [ə] に弱化していない上部ドイツ語最上部アレマン方言のヴァリス方言は、かつての語幹をかなりとどめている (Dingeldein 1983: 1197)。

(22) 語幹：[語根＋語幹形成接尾辞]＋語尾（単数主格）

ゲ	*kuningaz/*kununzaz	[kuningz-/kununz- + -a-] + -z	(＜印欧 * -o-s)
ヲ	kuningas	[kuning- + -a-] + -s	
ア	konungur	[konung- + -Ø] + -ur	
		(＜古ノ -r < ノル * -R < ゲ * -z) ¹⁹	

2-2-3. ドイツ語のゼロ語尾型—ウムラウト複数形の役割

注意を要するのは、ドイツ語のゼロ語尾（-Ø/-Ø）型である。これは -e/-e 型の一種で、語末音節の母音があいまい母音 -e [ə] に弱化した a- 語幹と i- 語幹の名詞に見られ、-e [ə] を含む -el/-en/-er で終わる語が該当する。ドイツ語では、handeln「行動する」/ich handle「私は行動する」/Handlung「行動」（← handel- + -en/-e/-ung）のように、無強勢母音の連続を強く嫌って、片方の -e [ə] が脱落する。オランダ語の handelen/ik handel/handeling「同上」と比較されたい。たとえば、a- 語幹の Wagen — Wagen-Ø「車」（＜ゲ *waznaz）は、中高ドイツ語では wagen — wagene だった。-e [ə] の脱落で、単複同形になってしまったのである。一方、i- 語幹のド Apfel — Äpfel-Ø「りんご」（＜ゲ *ap(u)liz）は、本来のウムラウトで区別している。北ゲルマン語の対応語は中性だが⁸、ア epli—epli-Ø/ス äpple—äpplen（＜ゲ *aplja-, Kroonen 2013: 32）のように、ja- 語幹²⁰の i- ウムラウトが単数形にも及んでいる。

このように、ウムラウトとは無縁だった a- 語幹の一部がウムラウトの有無を示すゼロ語尾（-Ø/-Ø）型になったのは、i- 語幹男性が a- 語幹男性に融合した結果である。このため、i- 語幹は「男性：ド Gast — Gäste 客 (2-3-3(27))」↔「女性：ド Kraft — Kräfte 力 (2-3-4(28))」という性による区分に分岐した。印欧祖語では i- 語幹には性の区分が入り込まず、男性と女性の語形変化

¹⁹ ア -ur の u は後代の「母音挿入」（スヴァラバクティ svarabhakti）による。*R はゲ *z /z/ がロータシズムで転じたノルド祖語の子音で、本来の *r と区別する。

²⁰ (20)① a- 語幹が半母音 j- を伴ったもの (3-1-1 参照)。

は同一だったのである (Bammesberger 1990: 123-125, Duke 2009: 87f.)

こうしてドイツ語では、単複が区別できない場合に i- 語幹由来のウムラウトを a- 語幹名詞に援用し、Acker — *Äcker-Ø* 「耕地」 (<ゲ *akraz) として補った。ただし、Wagen — Wagen-*Ø* 「車」のように、万能ではなかったのである。一方、語末音 -n/-e の脱落を被ったスイスドイツ語は、単複の区別ができなくなるのを恐れて、類推によるゼロ語尾ウムラウト複数形をフル回転させている。チューリヒ方言の Wage — *Wäge-Ø* 「車」、Aarm — *Äärm-Ø* 「腕」 (ド Arm — Arme <ゲ *armaz), Hund — *Hünd-Ø* 「犬」 (ド Hund — Hunde <ゲ *xundaz) はその例である (清水 2001: 175-177)。

2-2-4. 英語に残る複数形語尾 -s

本来の複数形語尾はどうなったのだろうか。それは英語で支配的な -(e)s (<ゲ *-(i/e)z <印欧 *-es) だった。正確には、語幹形成要素に続く単数形と共通の主格語尾としてのゲ *-z (<印欧 *-s) を含んでいる。ところが、古高ドイツ語では、(23)① taga-*Ø*/tagā-*Ø* のように、不幸にも脱落してしまったのである。本来のドイツ語の複数形に -s 型がないのは、このためであり、上述のように、単数形の語幹形成要素が複数形語尾に転用されたのである。他の西ゲルマン語の古語では、かなり保たれ ((23)① 古^フ dagos/古英 dagas), 北ゲルマン語ではロータシズムで -r (<ル *-R <ゲ *-z/z/) に姿を変えている ((23)① 古ノ dagar)。英語の語尾 -(e)s は、(23)の①などの -s が一般化した結果である。ただし、次章の「3. 複数形一屈折と派生の狭間」で見ると、複数形語尾 -s が支配的な現代ゲルマン語は英語だけである。(21) に挙げた ① a- 語幹男性, ③ i- 語幹男性, ⑤ n- 語幹女性の例で確認しよう。

(23) ① a- 語幹男性 : Tag — Tage < 古高ト tag — taga-*Ø*/tagā-*Ø*

ゴ dags — dagōs 古ノ dagr — dagar 古英 dæg — dagas 古^フ dag
— dagos (<ゲ *daʒaz — *daʒōz)²¹

²¹ a- 語幹複数主格形には、ゲ *-ō-z <印欧 *-o-es 以外に、ゲ *-ōz-ez/*-ōs-es <印欧 *-o-es

- ③ i- 語幹男性：Gast — Gäste < 古高ド gast — gesti-Ø
 ゴ gasts — gasteis 古ノ gestr — gestir (gester) 古英 giest —
 giestas 古ヱ gast — gesti-Ø (<ゲ *zastiz — *zastiz (<ゲ *i(j)-iz))
- ⑤ n- 語幹女性：Zunge — Zungen < 古高ド zunga — zungün-Ø
 ゴ tuggō — tuggōns 古ノ tunga — tungur (tungor) 古ヱ tunga —
 tungun-Ø 古英 tunge — tungan-Ø (<ゲ *tunzōn — *tunzōniz)

2-3. ドイツ語複数形語尾の変遷—名詞語幹の軌跡

2-3-1. iz-/az- 語幹 (> ir- 語幹) —-er 型中性名詞

ドイツ語の複数形を例に、名詞語幹の軌跡をたどってみよう。まず、(21)
 ④ iz-/az- 語幹から始める。定番の Lamm 「子羊」(<古高ド lamb) の語形変
 化を次に示す。道具・手段を表す具格については清水 (2019a: 71-73) 参照。

(24) 単数—複数：	ド	古高ド
主・対格	Lamm	Lämmer lamb lembir
与格	Lamm	Lämmern lambe lembirum
属格	Lamm(e)s	Lämmer lambes lembiro
具格	Ø(=なし)	Ø lambu Ø

本来の iz-/az- 語幹は少数の中性名詞に限られ、家畜を含む農耕関係の語
 が目立つ (古高ド farh 子豚/(h)rind 牛/huon 鶏/kalb 子牛/lamb 子羊/blat
 葉/ei 卵/(h)rīs 小枝 (ド Ferkel/Rind/Huhn/Kalb/Lamm/Blatt/Ei/Reis))²²。

ところが、古高ドイツ語の単数主・対格は lamb (ド Lamm <ゲ *lambiz)
 であり、-ir (<ゲ *-iz) の姿はない²³。古高ド kalb 「子牛」/blat 「葉」(ド Kalb/
 Blatt) も同様である。これは、「ゲルマン語語末音の法則」(ド germanische

-es とする近年の説がある (Fulk 2018: 147f., Bammesberger 1990: 39)。

²² ゲ iz-/az- 語幹に連なる印欧 s- 語幹 (es-/os- 語幹) には、動詞派生語が目立つ (ラ ge-
 nus—属格 generis <*genesis) 種類—gignere 生む, Ramat 1981: 61)。

²³ フィンランド語の借用語 lammas はゲ *-az (ゲ *-iz の異形態) を保っている。

Auslautsgesetze, [補説] 参照)²⁴ と呼ばれる複雑な「音韻法則」(sound law) の結果、中性名詞単数主・対格がゼロ語尾に摩滅したことによる。それなら、語尾を保った与・属・具格では -ir が残るはずだが、整合性を志向する語形変化のパラダイムには、「盲目的」ともたとえられる組織的な音韻変化の結果、デコボコになった面をカンナで平らにする「類推」(analogy) という横槍がつきものである。そこで、本来の -ir を放棄して、メジャーな a- 語幹中性の傘下に入った。*Kälbersbach/Blättersbach* の前半に対応する古高ド *kelb-ir-is-/plet-ir-s-* は、ir- 語幹 (<ゲ *iz-* 語幹) の単数属格の化石なのである。

2-3-2. a-語幹中性—er 型/-e 型中性名詞と接合要素

(21) ① a- 語幹中性名詞の定番であるド Wort 「言葉」(古高ド *wort* <ゲ **wurdan*) にゴート語の *waúrd* を添えて、語形変化を示してみよう²⁵。

(25) 単数—複数:	ド		古高ド		ゴ	
主・対格	Wort	Worte/Wörter	wort	wort	waúrd	waúrda
与格	Wort	Worten/Wörtern	worte	wortum	waúrda	waúrdam
属格	Wort(e)s	Worte/Wörter	wortes	worto	waúrdis	waúrdē
具格	Ø	Ø	wortu	Ø	Ø	Ø

ところが、ゴート語の複数主・対格 *waúrda* (<ゲ **-ō* <印欧 **-ā*) と違って、古高ドイツ語では、複数主・対格がゼロ語尾 *wort-Ø* (<西ゲ **-u* <ゲ **-ō* <印欧 **-ā*)²⁶ に摩滅し、単複が区別できなくて困っていた。上記の「ゲルマン語語末音の法則」のためである ([補説] C-1) 2. (3), (古高ド **-Ø* <) 西ゲ **-u*/ゴ *-a* <ゲ **-ō* <印欧 **-ā* 参照)。かつての語幹形成接尾辞の影も薄くなり、「語幹+語尾」の2部構成に簡素化しつつあった。そこで、13世紀後半以

²⁴ Boutkan (1995), Krahe/Meid (1969^a: 124-135), ドイツ語は Meisen (1968²: 2-6) 参照。

²⁵ 語幹の種類は複数与格に最も良く見られるが、その他の語形はそうとも限らない。

²⁶ 古ザクセン語では、短語幹 (short stem, 短母音+子音1つ) の語でかつての語尾 -u が残った (古高ド *faz-Ø* ↔ 古ザ *fatu* (丸形の) 容器)。

降, 新参者の *ir*-語幹 (<ゲ **iz*-語幹) 名詞の複数形に残った *-ir* を *a*-語幹中性名詞の複数形語尾として着服し始めた。1450 年頃には, *-er* は複数形語尾として確立し, ゼロ語尾複数形は衰退した。ド *Rad*—*Räder* 「車輪」, *Dorf*—*Dörfer* 「村」, *Haus*—*Häuser* 「家」はその例であり, ウムラウト可能な母音を含む語尾 *-er* による中性名詞複数形が必ずウムラウトするのも, *-er* が *-ir* に由来することによる。ド *Kind*—*Kinder* 「子供」もその一例である。1 人乗りでも *Kinderwagen* 「乳母車」と言うのは, 語幹形成接尾辞が複合語の接合要素 *-er*- に転用された結果であり, 複数の意味とは無縁である。現代の超少子化問題とも, まったく関係がない。

それでは, ド *Wort* 「言葉」の複数形に *Wörter* と *Worte* があるのはなぜだろうか。それは *Wörter* が *ir*-語幹 (<ゲ *iz*-語幹) の中性名詞に寄り添い, *Worte* が *a*-語幹の男性名詞にならって, それぞれ複数形語尾に変貌した *-er/-e* (<古高ド *-ir/-a*) を着服した結果である。*Einzelwörter* 「個々の言葉」↔ *Abschiedsworte* 「別れの言葉」のように, *-er* 型は個別的・具体的意味, *-e* 型は総括的・抽象の意味を表す「棲み分け」もしている。*Denkmal* 「記念碑」/*Tal* 「谷」の複数形は *Denkmäler*/*Täler* が普通で, *Denkmale*/*Tale* は古風であり, *Länder* 「国々」↔ *die Niederlande* 「オランダ」(*Land* 国) という区別をするペアも散見される。前者の *-er* 型は中性という性の絆^{きずな}, 後者の *-e* 型は *a*-語幹という語幹の絆に身を委ねた結果と言える。

ド *Rinderbraten* 「ローストビーフ」(*Rind* 牛)↔ *Schweinebraten* 「ローストポーク」(*Schwein* 豚) では, 異なる語幹形成接尾辞 (*-ir/-a*) が複合語の接合要素 (*-er/-e*) に転用されている²⁷。接合要素の種類に注目されたい。中性以外でも, 男性名詞 *Tag* 「日」(*a*-語幹男性) による複合語では, 1 日の賃金は *Tagelohn* 「日当」, 「日帰り旅行」は *Tagesreise* (*-es* 単数属格語尾)/*Tagereise* と言う。理由は明らかだろう。*Studentenleben* 「学生生活」, *Frauenstimme* 「女性の声」も女性と学生の人数は問わない。ともに *n*-語幹の男性弱変化名詞 *Student* 「学生」と, 以前は *n*-語幹の女性弱変化名詞だっ

²⁷ 接合要素の有無と種類は微妙である (ド *Rindfleisch* 牛肉, *Schweinsleder* 豚革)。

た Frau 「女」 の属格 -en から転用した接合要素 -en- である。

2-3-3. a- 語幹/i- 語幹男性—er 型の進展と ðe/-e/ ゼロ語尾型男性名詞

(21)① a- 語幹男性名詞の語形変化は, (26) のとおりである (ド Tag 日<古高ド tag/ゴ dags)。ドイツ語で具格・呼格以外に中性と違う点は, 複数主・対格語尾 -a (>ド -e) だけである。ド Wort 「言葉」の複数形 Worte が寄り添ったのも, 自然だったと言えよう。加えて, 次に述べるように, ドイツ語では複数形がそれと融合した (21)③ i- 語幹男性名詞の語形変化も, (27) に示す (ド Gast 客<古高ド gast/ゴ gasts)。

(26) 単数—複数:	ド		古高ド		ゴ	
主格	Tag	Tage	tag	taga/tagā ²⁸	dags	dagōs
対格	Tag	Tage	tag	taga	dag	dagans
与格	Tag	Tagen	tage	tagum	daga	dagam
属格	Tag(e)s	Tage	tages	tago	dagis	dagē
具格	Ø	Ø	tagu	Ø	Ø ²⁹	Ø
呼格	Ø	Ø	Ø	Ø	dag	Ø

(27) 単数—複数:	ド		古高ド		ゴ	
主格	Gast	Gäste	gast	gesti	gasts	gasteis
対格	Gast	Gäste	gast	gesti	gast	gastins
与格	Gast	Gästen	gaste	gestim	gasta	gastim
属格	Gast(e)s	Gäste	gastes	gasteo	gastis	gastē
具格	Ø	Ø	gastiu	Ø	Ø	Ø
呼格	Ø	Ø	Ø	Ø	gast	Ø

²⁸ 主格は tagā が本来の語形で, taga は対格に由来する (Krahe/Meid 1969^b: 11)。

²⁹ Bammesberger (1990: 36) は与格と同形の daga を挙げている。

同じく、複数形が a- 語幹男性名詞に身を寄せた中性名詞も、Jahr—Jahre「年」、Tier—Tiere「動物」など、かなり含まれている。北ゲルマン語では、「子供」は英語の born「生まれた」と同源の barn だが³⁰、複数形は由緒正しくゼロ語尾である（ス・プ barn-*Ø*/デ・フ₁ bōrn-*Ø*/ニ₁ born-*Ø*/ア börn-*Ø*）。u-ウムラウトによる「ø/o/ö（＜古ノ q/ɔ/）＜a」の交替からは、ノルド祖語の語尾 *-u（＜ゲ**-ō*＜印欧**-ā*）の面影が³¹偲ばれる。ド Jahr「年」/Wort「言葉」にあたる中性名詞も、単複同形である（ス・デ・プ・ニ₁ år/ord — år-*Ø*/ord-*Ø*, ア・フ₁ ár/orð — ár-*Ø*/orð-*Ø*）³¹。

ドイツ語でも、数詞とともに単位を表す中性名詞の複数形は、ゼロ語尾である（ド 2 Pfund-*Ø* 2 ポンド, 3 Dutzend-*Ø* 3 ダース）。これとの類推から、ゼロ語尾を示す男・女性名詞もある（ド 4 Grad-*Ø* 4 度（← der Grad）, 5 Mark-*Ø* 5 マルク（旧貨幣← die Mark））³²。オランダ語と西フリジア語の中性名詞 jaar/jier「年」も、単位の用法ではゼロ語尾である（オ zes jaar-*Ø*/西7 seis jier-*Ø* 6 年）。一方、不定の意味では語尾 -en を伴う（オ enkele jaren/西7 inkelde jierren 数年, 3-3-1 参照）。

ウムラウトを伴う -er 型は、複数形の便利な目印として中高ドイツ語期以降、大幅に増大し、中性名詞から Geist—Geister「幽霊」、Gott — Götter「神」（古くは中性）などの男性名詞にも及んだ。現代ドイツ語の -er 型の大多数は、中性・男性ともに本来の ir- 語幹（＜ゲ iz-/az- 語幹）とは無縁である。都市名 Wiesbaden「ヴィースバーデン」（ド Bad — Bäder 温泉, 中性）、Schaffhausen「シャフハウゼン」（ド Haus — Häuser 家, 中性）と州名 Unterwalden「ウンターヴァルデン」（ド Wald — Wälder 森, 男性³³）は、かつてのゼロ語尾複数与格（-en）に由来する³⁴。Spital — Spitäler「病院」、Ski —

³⁰ ド Kind/オ・フ₁ kind（＜ラ gignere 生む）も「生まれたもの」の意味だった。英 child はゴ kilbei「子宮」と同源である（寺澤 1997: 223）。

³¹ 北ゲルマン語では、「j+非後舌母音」/「w+後舌母音」の j/w が脱落している。

³² -e で終わる女性名詞は、単位の用法でも語尾 -n を伴う（Tiesema 1969²: 74f.）：ド 7 Tonnen 7 トン（← die Tonne）、8 Meilen 8 マイル（← die Meile）。

³³ ド Wald「森」（＜ゲ*walpuz）だけは 3-1-1 で紹介するマイナーな u- 語幹である。

Skier「スキー」などの借用語に援用されるほど、*-er* 型には生産性があった。

これと並んで、男・女性名詞共通の (21)③ *i*-語幹によるかつての「ウムラウト+*i*-型」も頻用され、ウムラウトを伴う *-e* 型につながった (*i*-語幹女性名詞の語形変化は、(28) 古高ドイツ *kraft*/ドイツ *Kraft* 参照)。あいまい母音 *e* [ə] を含む無強勢音節で終わる語では、語尾 *-e* の付加を嫌って、ウムラウトによるゼロ語尾 (*-∅*) 型 (ドイツ *Acker* — *Äcker-∅* 耕地 < ゲ **akraz*), *Garten* — *Gärten-∅* 庭 < ゲ **ǵardiz*) の契機になった。Altar — *Altäre*「祭壇」, Choral — *Choräle*「賛美歌」, Papst — *Päpste*「教皇」など、キリスト教関係の借用語にも取り入れられた。*a*-語幹の Wolf — *Wölfe*「狼」(< ゲ **wulfaz*), Hof「中庭, 宮廷」— *Höfe* (< ゲ **xōfaz*) は、類推による *ö* < *o* のウムラウトへの引き金を示す例である³⁵。地名 *Königshofen*「ケーニヒスホーフェン」の *-hofen* は、かつての複数与格のなごりである (Tiesema 1969²: 72)。

ただし、本来、*i*-語幹の中性名詞は Meer「海」(< 古高ドイツ *meri* 海, 湖) など少数しかない。類推で拡大したウムラウトを伴うゼロ語尾 (*-∅*) 型中性名詞は、Kloster — *Klöster-∅*「修道院」, Abwasser — *Abwässer-∅*「下水」, Lager — *Läger-∅*「在庫」の3語、*-e* 型は Floß — *Flöße*「いかだ」だけである (Kürschner 2008: 136, 147)。そして、語末音 *-i* が *-e* [ə] に弱化し、脱落する中で、複数を明示する *-er* 型 (< *-ir*) に道を譲った。

2-3-4. *ö*-語幹/*i*-語幹女性と *n*-語幹—*-en* 型/*-e* 型女性名詞と統一単数

最後に、女性名詞専用の (21)② *ö*-語幹は、(21)⑤ *n*-語幹と融合して *-en* 型になった (注 17 参照)。語末音 *-e* の女性名詞には、*n*-語幹だった Zunge「舌」(< 中高ドイツ *zunge* < 古高ドイツ *zunga* < ゲ **tunǵōn*) と *ö*-語幹だった Gabe「贈り物」(< 中高ドイツ *gebe* < 古高ドイツ *geba* < ゲ **ǵebō*) が含まれる。(28) に示すよ

³⁴ ゲルマン諸語の地名には、静止した位置を示す与格由来の語形が散見される。

³⁵ *ö* < *o* のウムラウトは後代の類推による。「ゲ **a* < 印欧 **o*」の音韻変化でゲルマン祖語の短母音は *a*/*e*/*i*/*u* の4種類になり、*o* は直後の音節の *a* の影響から *u* が低舌化する *a*-ウムラウトなどで復活した (ドイツ *Gold* 金 < 古高ドイツ *gold* < ゲ **zulpan*)。*o* の直後の音節には、ウムラウトの引き金となる *i* は現れなかったのである。

うに、前者は複数形のすべての格で n- 語幹由来の語尾 -n を獲得し、後者は単数形が主格以外で -n を失った。その結果、「単数：ゼロ語尾の統一単数」（ド Zunge-Ø/Gabe-Ø）↔「複数：主格語尾 -en」（ド Zungen/Gaben（-en←-e+-en））の対比に落ち着いたのである。ゼロ語尾の統一単数という女性名詞の結束には、中高ドイツ語以降、(21)③ i- 語幹女性名詞（Kraft 力<中高ド/古高ド kraft）も参入した。単数属格語尾 -(e)s の欠如も、結束の強化につながった（次表は「単数—複数」の順）。

(28)	贈り物 (ō- 語幹)	舌 (n- 語幹)	力 (i- 語幹)
中高ド	主格 gebe gebe	zunge zungen	kraft krefte
	対格 gebe gebe	zungen zungen	kraft krefte
	与格 gebe geben	zungen zungen	krefte /kraft kreften
	属格 gebe geben	zungen zungen	krefte /kraft krefte
ド	主格 Gabe Gaben	Zunge Zungen	Kraft Kräfte
	対格 Gabe Gaben	Zunge Zungen	Kraft Kräfte
	与格 Gabe Gaben	Zunge Zungen	Kraft Kräften
	属格 Gabe Gaben	Zunge Zungen	Kraft Kräfte

2-4. 語幹形成接尾辞、複数形語尾、複合語接合要素

男・女・中^{すう}の性の背後には、語幹による大昔の名詞のクラス分けが潜っており、数の表示に姿を変えている。そのからくりは、英語の語尾 -(e)s からは見えてこない。ドイツ語を例に紹介したように、複数形語尾の消長は名詞の語形変化の構造的転換にもつながった。複数形語尾に転用された語幹形成接尾辞は「接尾辞」(suffix) であり、名詞ごとに固有の「語形成」(word formation) の手段だった。それを複数形という「屈折」(inflection) の範疇に文法化したのである。これは文法的項目が予想しない別の機能に転じる「外適応」(exaptation) の一例と言える (Lass 1990)。

現代ゲルマン諸語ではドイツ語を始めとして、語幹形成要素が複数の意味

とは無関係に、男・中性単数属格語尾 -(e)s を離れた Liebes**brief**「ラブレター」と同じく、複合語の「接合要素」(linking element) に広範に転用されている。Kinder**w**agen「乳母車」、Studenten**en**leben「学生生活」と並んで、Herzen**s**-wunsch「心(Herz)からの願い」のように重複(-en-s-)する例もある。

ただし、接合要素に転じたかつての語幹形成接尾辞は、ときには複数の意味を強調する手段に利用されることもある。筆者が留学先のドイツ・ケルン大学で師事した北欧語学の権威、グレーンケ先生(Ulrich Groenke 1924-2013)のドイツ語による好著に、*Die Sprachenlandschaft Skandinaviens*『スカンジナビアの諸言語景観』(1998)がある。普通は「言語のありかた」の意味で、**Sprach**landschaft「言語景観」(← Sprache 言語)として使うが、ここでは「スカンジナビアの諸言語」の意味を込めて、複数形 Sprachen を取り込んだ即席造語になっている。アイスランド語を始めとする北ゲルマン諸語に加えて、フィンランド語にも通曉されていた先生の気さくな人柄が^{しの}偲ばれるしられたタイトルのように思われる。

3. 複数形—屈折と派生の狭間

3-1. 複数形と名詞語幹—母音語幹, 子音語幹, 語根語幹

3-1-1. 名詞語幹概観 (1) —母音語幹

それでは、かつての名詞の語幹を概観しよう。語幹形成要素に応じて、「母音語幹」(vocalic stem)、「子音語幹」(consonantal stem)、「語根語幹」(root-stem)に分かれる。後者2つは起源が古く、ゲルマン語では少数派である。

まず、母音語幹には①～④の4種類がある。

①「**a- 語幹**」(<印欧 o- 語幹)と②「**ō- 語幹**」(<印欧 ā- 語幹)は母音語幹の代表で、他の語幹も大量に流入した。a- 語幹は男性と中性で、有生と無生の名詞が起源である。集合名詞と自然性の女性が結びついた ō- 語幹は女性専用で、抽象名詞も含まれる(清水 2019a: 43-46)。半母音を伴う ja-/wa- 語幹と jō-/wō- 語幹については、折りに触れて言及するにとどめる。

③「**i-語幹**」の大部分は男・女の2性で、2-3-3で述べたように、ドイツ語では中性は Meer「海」にとどまる。男性は a-語幹、女性は ö-語幹との融合が顕著である。i-ウムラウトを伴い、ドイツ語では複数形の目印として a-語幹男性名詞を中心に利用された。これも 2-3-3 で説明したとおりである。

④「**u-語幹**」の例は少なく、早期に a-/i-語幹に移行した。古高ド sun(**u**)「息子」(男性<ゲ *sunuz), ゴ hand**us**「手」(女性<ゲ *xanduz), 古高ド fih**u**「家畜」(中性・単数のみ<ゲ *fexu) の u がその証である。ド Sohn—Söhne「息子」, Hand—H**ä**nde「手」の i-ウムラウトは、i-語幹への移行による。ド vor**h**anden「手元に」, ab**h**anden kommen「失われる」, aller**h**and「様々な」(<中高ド aller **h**ande) は複数与・属格のなごりである。ア hönd [œ] (<古ノ hōnd /ɔ/)—属格 handar「手」では a が u-ウムラウトし (ア ö <古ノ q <ル *a/_u), 単数与格 hendi では i-語幹の侵入で i-ウムラウトする³⁶。古くは身体部位名が目立つ: ゴ kinnus^{ほお}頬/liþus 手足 (ド Kinn^{あご}顎/Glied)/qiþus 胃; 3-1-3 参照: ゴ fōtus 足/tunþus 歯 (ド Fuß/Zahn), Ramat 1981: 62)。

3-1-2. 名詞語幹概観 (2) —子音語幹

子音語幹にも 4 種類あり、下記の⑤～⑧に分かれる。

⑤「**n-語幹**」は個別化・限定の意味を表し、ゲルマン祖語が形容詞弱変化にも転用した。男・女・中性名詞を派生し、ドイツ語では男性弱変化名詞 (ド Bote—Boten 使者<ゲ *budōn) に受け継がれている。女性弱変化名詞 (ド Zunge—Zungen 舌<ゲ *tunzōn) は -en 型の強変化に移行した (2-3-4 参照)。中性の Herz—単与 Herzen—単属 Herzens—複 Herzen「心臓」(<ゲ *xer-tōn) も単数主・対格以外で -en を保ち、男性の Wille, -ns/-n「意志」と同類の n-語幹弱変化名詞と言える。中性 -en 型の Auge—Augen「目」/Ohr—

³⁶ 語形変化は次のとおり: ア 単数: 主・対格 hönd—与格 hendi—属格 handar/複数: 主・対格 hendur—与格 hōndum—属格 handa

Ohren「耳」(<ゲ *auzōn/*auzōn) も古い仲間である。

アイスランド語とフェーロー語は語末音 -n の脱落を被ったが、-i/-a/-u の交替で男性 (ア・フ₁ hani/単数斜格 (=対・与・属格) hana—hanar 雄鶏 <ゲ *xanōn), 女性 (ア・フ₁ tunga/tungu—tungur 舌), 中性 (ア hjarta/hjarta—hjörtu, フ₁ hjarta/hjarta—hjörtu(r) 心臓) の3性で弱変化名詞を保持している (男・女性複数 -r は強変化との類推, Wessén 1965: 95, Noreen 1970⁵: 280)。両言語には無強勢のあいまい母音 e [ə] がないので、語末母音で区別できる。n- 語幹の面影は、アイスランド語の女性名詞の一部と中性名詞の複数属格 tungna/hjartna の n に^{しの}偲ばれる (Kress 1982: 78-81)。スウェーデン語の hjarta—hjärtan「心臓」は複数形語末音で -n を保っている。

下位区分として in- 語幹があり、形容詞から女性の抽象名詞を派生した (ド Höhe 高さ—hoch 高い (<古高ド höhī—hōh <ゲ *xauxīn—*xauxaz)。アイスランド語では、複数形を欠く無変化の女性弱変化名詞に残っている (ア gleði^{うれ} 嬉しさ—gladur 嬉しい, 英 gladness—glad, Thomson 1987: 177)。

⑥「r- 語幹」(<印欧 ter- 語幹) は男・女性の親族名称専用で、ド Vater/英 father「父」, Bruder/brother「兄弟」, Mutter/mother「母」, Tochter/daughter「娘」, Schwester/sister「姉妹」が該当する。ド Sohn/英 son「息子」(u- 語幹), フランス語から借用した傍系親族名称 Onkel/uncle「叔父」, Tante (< t-+ -ante)/aunt「叔母」, n- 語幹由来のド Vetter「従兄弟」/Gevatter「代父」(<古高ド fetiro^{おじ}/gifatero 代父) は除く。親族名称は最も身近な名詞で、言語類型論的にも「人称代名詞>固有・親族>人間>動物>無生物」という「シルヴァースティーンの名詞句階層」(Silverstein's hierarchy) で上位を占める (角田 2009²: 41-65)。このことも、語幹形成要素が保たれた要因のひとつと考えられる。

しかし、それゆえに性の区別が侵入せず、清水 (2019a: 44) で見たように、現在でもアイスランド語では男・女性とも同じ屈折語尾を示す。そこで、語源的に無縁の i- ウムラウトを拝借して、ア faðir「父」/móðir「母」—feður/mæður (<古/ feðr/mæðr) のように単複を区別することになった。

ドイツ語で確認しよう。a-語幹名詞単数形 Tag「日」は語根 (<ゲ *daȝ-), 複数形 Tage「日々」は語幹 (<ゲ *daȝ-a-) に相当し、本来、ともに単数形だった。一方、r-語幹の親族名称は、Vater「父」/Mutter「母」(<ゲ *fadēr/*mōdēr) という単数形自体が語幹である。本来の複数形語尾 -s はすでに失われているので複数形語尾はつかないはずで、古高ドイツ語の fater/bruoder/muoter/tohter「父/兄弟/母/娘」は単複同形だった。しかし、それでは都合が悪く、古高ドイツ語後期には、複数形を性に応じて「男性 fater**a**/bruoder**a**」⇔「女性 muoter-**Ø**/tohter-**Ø**」とした。中高ドイツ語では、「第二次ウムラウト」(ド Sekundärumlaut) の発達から語幹母音で区別しやすくなり、ウムラウト複数形の veter/brüeder/müeter/töhter に統一した (Kürschner 2008: 282)。問題は、ウムラウトできない古高ド/中高ド swester (>ド Schwester)「姉妹」である。無強勢あいまい母音 e [ə] の連続を嫌うドイツ語では、-ter/-der に語尾 -e/-er は重ねられない。そこで講じた策は、i-語幹由来のウムラウトと n-語幹由来の en-型の「二重盗用」だった。

- (29) ド ① ウムラウト可>ウムラウト: Vater—Väter 父, Bruder—Brüder 兄弟, Mutter—Mütter 母, Tochter—Töchter 娘
 ② ウムラウト不可>語尾 -en: Schwester—Schwestern 姉妹
 (-ern←-er + -en)

スイスドイツ語チューリヒ方言は、語末音 -n の脱落 (チ Frau—Fraue 女⇔ド Frau—Frauen) と語末音 -e の脱落 (チ Fisch—Fisch-Ø 魚⇔ド Fisch—Fische) を被った。複数形は、-e 型 (Frau の例参照), -er 型 (チ Blatt—Bletter 葉⇔ド Blatt—Blätter), -ne 型 (チ Müli—Mülene 製粉機⇔ド Mühle—Mühlen), ゼロ語尾 (-Ø/-Ø) 型 (チ Toor—Toor-Ø 門/Fuess—Füess-Ø 足⇔ド Tor—Tore/Fuß—Füße) だけである。そこで、-er の重複を避けてウムラウトと語尾 -e で複数形を表示し、直系親族名称きずなの絆を堅持している³⁷。

³⁷ ウムラウトのみの語形も見られる: チ Brüeder/Brüedere (Schobinger 2007³: 53,

- (30) ヱ ① ウムラウト + 語尾 -e : Vatter—**Vättere** 父, Mueter—**Müetere** 母
 ② 語尾 -e : Brüeder—Brüedere 兄弟, Tochter—**Töchtere** 娘,
 Schwöschter—Schwöschtere 姉妹
 (Beilstein-Schaukelberger 2007²: 65)

北ゲルマン語では、デンマーク語、ブークモール、ニューノシュクがこれにあたる。無強勢母音が e [ə] に弱化していないスウェーデン語は、自然性の男性・女性で分ける点で上記の後期古高ドイツ語に似ている。

- (31) デ ① ウムラウト + 語尾 -e : fa(de)r—**fædre** 父, mo(de)r—**mødre** 母, bro(de)r—**brødre** 兄弟, datter—**døtre** 娘
 ② 語尾 -e : søster—**søstre**
 ブ ① ウムラウト + 語尾 -e : far—**fedre** 父, mor—**mødre** 母, bror—**brødre** 兄弟, datter—**døtre** 娘
 ② 語尾 -e : søster—**søstre** 姉妹
 ニュ ① ウムラウト + 語尾 -ar/-er/-ø : far—**fedrar** 父, mor—**mødrer** 母, bror—**brørr** 兄弟, dotter—**døtrrr** 娘
 ② 語尾 -er : systen—**systrrer** 姉妹
 ス ① 男性—ウムラウト : fa(de)r—**fäder** 父, bro(de)r—**bröder** 兄弟
 ② 女性—[ウムラウト +]語尾 -ar : mo(de)r—**mödrar** 母, dotter—**döttrar** 娘 ; systen—**systrar** 姉妹

⑦「(ir-語幹<) iz-/az- 語幹」(<印欧 s- 語幹)については、「2. 複数形と名詞の語幹」ですでに詳述した。3-4 で関連して改めて取り上げる。

⑧「nd- 語幹」(<印欧 nt- 語幹)は動詞の現在分詞 (ド-end) に由来する人間名詞を表し、すべて男性である。英語の現在分詞 -ing も古くは -ende だっ

Gallmann 2015³: 128), Töchter (Gallmann (2015³: 472)。

た (英 *friend*)。語例は少数で、他の語幹に移行した。ド *Freund*—*Freunde* 「友人」 (<ゲ *frijōndz)/*Feind*—*Feinde* 「敵」 (<ゲ *fjēndz) は、「愛している者」/「憎んでいる者」が原義で、a- 語幹への移行例である。対応するゴート語の *frijōnds*/*fijands* は *frijōn*/*fijan* 「愛する/憎む」の現在分詞と同形である。アイスランド語の *frændi*—*frændur* は「親戚」の意味で弱変化である。

nd- 語幹はドイツ語の男性弱変化名詞 *Student* 「大学生」/*Protestant* 「新教徒」にも見られ、これはラテン語の現在分詞 *studēns*/*prōtestāns* (← *studēre* 努力する/*prōtestārī* 抗議する) の借用である。対格 *studentem*/*prōtestantem* など斜格のアクセント (-*dén*-/-*tán*-) に従って、語末音節 -*dént*-/-*tánt*- に強勢を置き、日本語のカタカナ表記に似て外来語であることを意識している。

3-1-3. 名詞語幹概観 (3) —語根語幹

⑨語根語幹は語幹形成接尾辞を欠き、語根が語幹になる「語根名詞」(root-noun) を形成する³⁸。男性は少なく、他の語幹への移行が顕著で、代表例のド *Mann* (<ゲ *mannz, 語根 *mann* + 語幹形成接尾辞 -Ø + 単数主格語尾 -z) 「男」には複数形が 3 つある。①*Männer* 「男」は ir- 語幹 (<ゲ iz- 語幹), ②*Mannen* 「封建家臣」(ド *Lehnmänner*) は n- 語幹への移行形, ③*Mann-Ø* 「人員」(ド *elf Mann* 11 名) が語根名詞のなごりである³⁹。古くは「人間」の意味で (英 *mankind* 人類), 「なでしこジャパン」も *Fußballmannschaft* 「サッカーチーム」である。ゴ 単主 *manna*—単対 *mannan*—複主・対 *mans*/*mannans*—複与 *mannam* も n- 語幹 (*hana* 雄鶏—*hanan*—*hanans*—*hanam*) の語形を含んでいる (Krause 1968³: 170)。

女性の例は男性より多く、好例はド *Nacht* 「夜」 (<ゲ *naxtz) である。複

³⁸ 23 例とも言われる語根名詞 (Fulk 2018: 165, Schwink 2004: 32) に正規の中性名詞はない。ゴ *fōn* 「火」(ド *Funke* 火花 <ゲ *fun- ↔ ド *Feuer*/英 *fire* <ゲ *fōr-) は中性の例とされることもあるが、「水」(ド *Wasser*/英 *water* <ゲ *watar- ↔ ア *vatn*/ゴ *watō* <ゲ *watan-) と並んで、混成的な r-/n- 語幹を示す (Kroonen 2013: 151, 575f.; Pfeifer 2004²: 340, 384; Fulk 2018: 180)。

³⁹ ド *Zimmermann*—*Zimmerleute* 「大工」等の複合語を含めれば、4 種類になる。

数形 *Nächte* は i- 語幹への移行形で、ウムラウトを欠く *Weihnachten* 「クリスマス」が語根名詞の痕跡である。中高ドイツ *ze den wihen nahten* 「聖なる (wihen) 夜 (den~nahten) に (ze)」という前置詞句に由来し、*naht-* はゼロ語尾複数形、*-en* は複数与格語尾である。同じ意味の *Weihnachtsfest* 「クリスマス」にならって中性になり、女性単数 *Weihnacht* も 18 世紀に一般化した (Pfeifer 2003⁶: 1550)。

語根語幹は起源が古く、3-1-1④ u- 語幹で挙げた *gōfōtus* 「足」/*tunþus* 「歯」(ドイツ *Fuß/Zahn* < 古高ドイツ *fuoz/zan(d)*) は、ゲルマン祖語以前は語根語幹だった (Ramat 1981: 62)。ラテン語の対応語 *pēs/dēns* の対格 *pedem/dentem* では、語根 *ped-/dent-* に直接、語尾 *-em* が付加されている。ゲルマン祖語では、**fōtz~*fōtuz*, **tunþus* という u- 語幹への移行形で再構される。ドイツ語では i- 語幹に移行し、*Fuß—Füße*, *Zahn—Zähne* とウムラウトする。英語の *foot—feet*, *tooth—teeth* では、ウムラウトで生じた前舌円唇母音が非円唇化した。

3-2. 現代ゲルマン諸語の複数形 (1) —北ゲルマン語

以下では、現代ゲルマン諸語の複数形を概観していこう。まず、北ゲルマン語について、主要語幹の複数形語尾を現代語と対照させてみる⁴⁰。

(32) 男性 : <u>-ar (a- 語幹)</u>	<u>-ir (i- 語幹)</u>	<u>-ar (n- 語幹弱変化)</u>
古ノ dagr—dagar 日	gestr—gestir 客	bogi—bogar 弓
ア dagur—dagar	gestur—gestir	bogi—bogar
フ dagur—dagar	gestur—gestir	bogi—bogar
ニ dag—dagar	gjest—gjester/(gjestar)	boge—bogar
ブ dag—dager	gjest—gjester	bue—buer
ス dag—dagar	gäst—gäster	båge—bågar
デ dag—dage	gæst—gæster	bue—buer

⁴⁰ ニューノシュクには異形があり、Hovdenak et al. (red.) (1986) に従って示す。

女性：-ar (ō- 語幹)	-ir (i- 語幹)	-ur (n- 語幹弱変化)
古ノ gjōf—gjafar 贈り物	tið—tiðir 時間	tunga—tungur 舌
ア gjōf—gjafir	tið—tiðir	tunga—tungur
フ ₁ gáva—gávur	tið—tiðir	tunga—tungur
ニ ₁ gåve—gåver	tid—tider	tunge—tunger
ブ gave—gaver	tid—tider	tunge—tunger
ス gáva—gåvor	tid—tider	tunga—tungor
デ gave—gaver	tid—tider	tunge—tunger
中性：-Ø (a- 語幹)	-Ø (ja- 語幹)	-u (n- 語幹弱変化)
古ノ land—lond 土地	epli—epli りんご	auga—augu 目
ア land—lōnd	epli—epli	auga—augu
フ ₁ land—lond	súrepli—súrepli(r)	eyga—eygu(r)
ニ ₁ land—land	eple—eple	auga/auge—augo/auge
ブ land—land	eple—epler	øye—øyne
ス land—länder	äpple—äpplen	öga—ögon
デ land—lande	æble—æbler	øje—øjne

共通の特徴は、語末音 -n の脱落（ア/ス i/i↔ド in ～の中に、ア/ス koma/komma↔ド kommen 来る）とロータシズム（-r < /ル *-R < ゲ *-z）である。後者の結果、語尾 -r による複数形が目立つが、これは英語の -s にあたり、英-es は語尾 -ar/-ir/-ur/-or/-er に対応するとみなせばいい。そこで、①「r- 型」（ar/-ir/-ur/-or/-er/-r-）、②「ゼロ語尾（-Ø/-Ø）型」、③「母音型」の3種類が基本になる。例外は、スウェーデン語の n- 型中性名詞（ス öga—ögon 耳、äpple—äpplen りんご）で、古スウェーデン語の弱変化中性名詞複数（古ス ögha—öghun 耳、Wessén 1965: 104）が語末音 -n を保持したことによる。一方、英語で支配的な語尾 -s は、ロータシズムで -r に変わったので、ごく少数の大陸北ゲルマン語の外来語に限られる（Haugen 1982: 96-98, 113）。

アイスランド語とフェーロー語では、無強勢母音が e [ə] に弱化しておらず (ア・フ₁ dagur (<古ノ dagr)—dagar 日, ア・フ₁ gestur (<古ノ gestr)—gestir 客), 3-1-2 ⑤ n-語幹の説明で述べたように、語末母音 -i/-a/-u の交替で男・女・中性の弱変化名詞を堅持している (Thráinsson 1994: 153, Barnes 1994: 198)。男・女性名詞複数では強変化との類推で -r が加わっており、とくにアイスランド語は中性と一線を画している。スウェーデン語もある程度、無強勢音節で以前の母音を保持している。強変化中性名詞は由緒正しくゼロ語尾で、u-ウムラウト (ア ö/フ₁ o <古ノ q/ɔ/< a/_ u) による「a—ö(ø)/o」の交替が大陸北ゲルマン語よりも豊富である (「ア・フ₁ land—lönd-Ø/lond-Ø 土地」↔「デ/ス/ブ/ニ₁ land—lande/länder/land-Ø/land-Ø」)。古東ノルド語では古西ノルド語よりも u-ウムラウトが下火だった (Duke 2009: 154)。

大陸北ゲルマン語で最も簡素化が進んだのは、デンマーク語である (Kürschner 2008: 229f., Anhang 4; Lundskær-Nielsen/Holmes 2010²: 23-42)。

- (33) デ ① -er [ɐ] 型: 約 60%。1 音節の子音で終わる両性名詞 (en gæst—gæster 客), 複合語以外の多音節名詞 (両性 en måned—måneder (暦の) 月, 中性 et æble—æbler (←-e-er) りんご), 強勢音節母音で終わる両性名詞 (en sky—skyer 雲), 外来語
- ② -e [ə] 型: 約 25%。無強勢音節の -er [ɐ] で終わる多音節名詞 (en lærer—lærer 教師), 1 音節の子音で終わる両性名詞 (en dag—dage 日) と一部の中性名詞 (et land—lande 土地)
- ③ ゼロ語尾型: 約 15%。1 音節の子音で終わる中性名詞の多く (et ord—ord-Ø 言葉) と少数の両性名詞 (en sten—sten-Ø 石)

語尾は 3 種類で、音節数、強勢、語末音、性が区別の基準だが、例外が多く、とくに 1 音節名詞ではあいまいである。子音で終わる両性名詞は、①-er 型 (en gæst—gæster 客) ↔ ②-e 型 (en dag—dage 日) ↔ ③ゼロ語尾型 (en sten—sten-Ø 石) に分かれてしまい、中性名詞では、②-e 型 (et land—lande 土地) ↔ ③ゼロ語尾型 (et ord—ord-Ø 言葉) の間ではっきりしない。

無強勢語末母音の弱化をある程度、免れたスウェーデン語には、語尾が6種類ある。ただし、語尾 -or (7.58%)/-ar (19.74%)/-er (30.78%)/-r (2.15%) は「r-型」にまとめられ、約60% (=60.25%) に達する。語尾 -er の約5% 以外は両性である。「ゼロ語尾型」は約20% (=21.31%, その中で約75%が閉音節中性名詞)、「n-型」は約4% (=4.1%, 開音節中性名詞) である (Kürschner 2008: 200-202, Anhang 3)。語尾 -e はなく、性との対応もより明確である。理由の1つは、中期スウェーデン語と中期デンマーク語で失われた a- 語幹男性名詞と ò- 語幹女性名詞の複数形語尾 -r が、デンマーク語と違って1500年以降に復活し、男性と女性の絆を強めた点にある。一方、デンマーク語では、ゼロ語尾だった中性名詞が語尾 -e/-er との間で揺れて、性との対応にずれが生じた (Duke 2009: 157-163)。

ブークモール (男・女・中の3性の場合) では、親族名称などを除いて大まかに言うと、「①語尾 -(e)r : 男・女 (・中) 性, ②語尾 -e : 男 (-er) (・中) 性, ③ゼロ語尾 -Ø : 中性」となる。同様にニューノシユクは「①語尾 -ar : 男・女性 (-ing), ②語尾 -(e)r / (-or) : 女性, ③ゼロ語尾 -Ø (a—o の交替) : 中性」となり (Askedal 1994: 230), 性との対応が最も明確である。

まとめると、大陸北ゲルマン語では、「ニューノシユク > スウェーデン語 > ブークモール > デンマーク語」の順に性との対応がくずれ、不規則性が強まる。個々の例は (33) に示すにとどめる。

3-3. 現代ゲルマン諸語の複数形 (2) —西ゲルマン語

3-3-1. オランダ語の複数形—語尾 -en/-s と強弱格の原則

オランダ語に関連する西ゲルマン語で躍進したのは、n- 語幹由来の語尾 -en である。オランダ語では、外来語を除くと、かつての語幹や性はもはや無関係で、「強勢音節 + 語尾 -en [ə(n)]」↔「無強勢音節 + 語尾 -s [s]」という音韻規則による使い分けが支配的である (Van Haeringen 1962²a: 187)。a-/i- 語幹由来の語尾 -e は脱落し、ゼロ語尾とともに18世紀までに語尾 -en に融合した。ir- 語幹 (<ゲ iz- 語幹) 由来の -er 型 (ド Lamm—Lämmer 子羊) も二重複数「-er + -en」で語尾 -en に取り込んだ (オ lam—lammeren, 中性15

例, Booij 2019²: 18)。ウムラウト複数は稀であり, 単複同形の名詞はほとんどない⁴¹。英語の語尾 -(e)s に対応する語尾 -s は少数派で, e [ə] を含む -e/-el/-em/-en/-er/-erd で終わる語などに用いる (オ *wagen*—*wagens* 車, *lepel*—*lepels* スプーン)。そのルーツは, 接尾辞 -er 「～する人」による動作主名詞 (中 *ridder*—*ridders* 騎士, ja- 語幹男性) だった (Van Loey 1970⁸: 124, Duke 2009: 197-200)。

上記の両語尾の使い分けは, 単数形から見た「入力条件」(input condition) による。「出力条件」(output condition, Booij 1998) としての複数形自体に注目すると, 「強勢音節+無強勢音節」の「強弱格」(trochee) で語が終わるのを優先する「強弱格の原則」(trochaic principle) の一環と言える (Booij/Van Santen 1998²: 87, Booij 2019²: 20)。(34) ②は無アクセント音節があいまい母音 e [ə] を含む語以外の例, ③は -or/-on/-ol で終わる外来語で, アクセントの移動と長母音化によって語幹の交替を伴う例である。

- (34) オ ① *zus*—*zussen* 姉妹 ↔ *zuster*—*zusters* 看護師, 修道女
 ② *kanon* [ka'ˌnɔn]—*kanonnen* 規範 ↔ *kanon* ['ka'ˌnɔn]—*kanons* 大砲
 ③ *motor* ['móːtɔr]—*motors* ['moːtɔrs]/*motoren* [mo'ːtɔrə(n)]
 モーター, オートバイ (ド *Motor* ['moːtɔɐ̯]—*Motoren* [mo'toːkɔn])

オランダ語もドイツ語と同じく, 無強勢母音 e [ə] の連続を嫌う。オ *handelen* ['handələ(n)] 「行動する」↔ド *handeln* (-eln←-el+ -en) など少数の動詞に対して, 高頻度の名詞複数形ではとくにそうである。2つの語尾が併存する *appel* ['apəl]—*appels* ['apəls]/*appelen* ['apələ(n)] 「りんご」では,

⁴¹ オ *stad* [ɑ]—*steden* [eː] 「都市」(ド *Stadt*—*Städte*) は稀なウムラウトの例である。動詞の現在形もウムラウトを示さない (オ *varen* 船で行く—*hij vaart* 彼は船で行く ↔ ド *fahren* 乗物で行く—*er fährt* 彼は乗り物で行く<古高ド *faran*—*ferit*)。

appels が普通で, appelen は古風である。

語末が -e [ə] の語では単複どちらも強弱格になるので, bode ['boːdə]—boden ['boːdə(n)]/bodes ['boːdəs] 「使者」のように, 普通は両語尾が可能である。ただ, boden は bode の -e を除く手間がかかり (オ bood-Ø+ -en ← bode+ -en, Booij 2019²: 22), -en [ə(n)] の -e を除くと不明瞭になるので, bodes が普通である。複数形の形態表示への要求は強く, 語末が /s/ の名詞は語尾 -s では区別できない。そこで, 音韻規則としての「強弱格の原則」を破って, 形態規則としての「強弱弱格」(dactyl) による語尾 -en の付加が例外的に許容される (オ cursus—cursussen ['kyrsysə(n)] 講習)。

3-3-2. 西フリジア語の複数形—語尾 -en/-s と加音-e

ところが, 同じく複数形語尾が -en [ən]/-s [s] の西フリジア語では, -e [ə] で終わる名詞の正規の複数形は, 語尾 -en による boade ['boədə]—boaden ['boadən] 「使者」だけである。なお, オランダ語の無強勢の -en [ə(n)] と違って, 西フリジア語の -en [ən] では, -n [n] は脱落しない。

フリジア語学の巨匠, J. フクストラ (Jarich Hoekstra) は, その理由を -e [ə] というあいまい母音 (シュワー schwa) の形態的役割に求めている (Hoekstra 2011)。オランダ語の名詞 bode の語末音 -e [ə] は, 語の一部に融合した「添え物」にすぎず, 複数形語尾の選択は「強弱格の原則」という音韻規則で十分である。一方, 女性形接尾辞 -e [ə] は性 (両性) を決定する「形態素」(morpheme) なので, 接尾辞に固有の形態規則が優先されて, 語尾 -s を選択する (オ pianiste—pianistes 女流ピアニスト ← pianist ピアニスト)。

これに対して, ドイツ語で語末音 -e [ə] の名詞の多くは男性弱変化と女性で, 一部は中性である。前者 2 性の複数形は -(e)n 型 (ド der Bote—Boten 使者, die Zunge—Zungen 舌), 後者はゼロ語尾 (ド das Gebirge—Gebirge-Ø 山脈 < 古高ド gibirgi, gi- は集合の意味の接頭辞), または類推による n- 型 (ド Ende—Enden 終わり < 古高ド enti < ゲ *andjaz, ja- 語幹) である。この -e [ə] は「接尾辞」(suffix) ではなく, 具体的な意味も表さない。それでも単なる語末音ではなく, 性と複数形を左右する役割があり, 語幹とは形態的に独

立の「加音」(augment)と考えられる。ようするに, n- 語幹/ja- 語幹 (Braune/Heidermanns 2018⁶: 260) の残響なのである。

西フリジア語でも, (35) のように, ①語末音 -e [ə] の名詞がオランダ語よりもかなり多く, その有無によって, ②性や③複数形が変わる例がある。そこで, この種の名詞の語末音 -e [ə] は加音であり, 加音自体に固有の語尾 -en (→-n) を選択する形態規則が優先されて, 「強弱格の原則」という音韻規則とは別の語形が選ばれるという。Hoekstra (2011) による以上の説は, 規則の適用順序を重視する「最適性理論」(optimality theory) に基づいている。

- (35) ① 西フ -e [ə] : tonge 舌/seage のこぎり/skijrre はさみ/tomme 親指
 ↔ オ -Ø : tong-Ø/zaag-Ø/schaar-Ø/duim-Ø
 ② 西フ -e [ə]—両性 : hoale 洞窟/souwe ふるい/golle 干し草置き場
 ↔ オ -Ø—中性 : hoal-Ø/sou-Ø/gol-Ø
 ③ 西フ -e [ə]—複数 -n (←-en) : rigele—rigelen 列, keppeler—keppelen 群れ
 ↔ オ -Ø—複数 -s : rigel-Ø—rigels, keppel-Ø—keppels

3-3-3. アフリカーンス語の複数形—簡素化と語幹異形態

これに対して, 語末音 -n の脱落を徹底し, 複数形語尾を -e [ə]/-s [s] としたアフリカーンス語では, bode—bodes 「使者」に限られる (Van Haeringen 1962²a: 191)。オランダ語の語尾 -eren [ərən] (オ kind—kinderen 子供, lam—lammeren 子羊) もほぼ語尾 -ers [ərs] に統一した (77 kind—kinders, lam—lammers)。強弱格を出力条件とする音韻規則に一本化したのである。77 arm—arms 「腕」/helms 「ヘルメット」 (オ arm—armen/helm—helmen) では, 母音性の高い「鳴音」(sonorant) の連続 -rm/-lm を避けて, [ˈarəms]/[ˈhələms] のように, 正書法には反映されないが, [ə] をはさんで強弱格を確保する。ただし, 母音間の子音脱落や音節末子音の簡素化のために, 皮肉にも, 単数形と複数形の間で「語幹異形態」(stem allomorphy) を示すペアが大量に生まれてしまった (清水 2001: 172-174, Donaldson 1993: 69-80)。

- (36) 77 *dag—dae* 日 (オ dag[a]—dagen[a·])
brug—brûe 橋 (brug—bruggen)
hoof—hoofde 頭 (hoofd—hoofden)
nag—nagte 夜 (nacht—nachten)

以上の3言語では、複数形語尾の選択が旧語幹に応じた形態規則から、強弱格を複数形の出力条件とする音韻規則に移行している。その度合いは、「アフリカーンス語＞オランダ語＞西フリジア語」の順に進んでいる。

3-4. 複数形と指小形—屈折と派生の狭間

3-4-1. ドイツ語の *-er* 型複数形と指小形—派生後屈折の原則

最後に、ドイツ語の指小辞 *-chen/-lein* による指小形の変則的な複数形を紹介しよう。語尾 *-er* を伴い、愛着「小さな・かわいい～」を込めたごく少数の語（ド *affektive Bildungen*, Duden 1998⁶: 505）がその例である。

- (37) ド 指小形 *Kindchen/Kindlein* 小さな子供—複数 *Kinderchen/Kinderlein* (← *Kind*—複数 *Kinder* 子供)
Kleidchen 小さな服—*Kleiderchen* (← *Kleid*—*Kleider* 服)
Männchen 小さな男—*Männerchen* (← *Mann*—*Männer* 男)
Dingelchen 小さな物—*Dingerchen* (← *Ding*—*Dinge/Dinger* 物)

ここでは、複数形語尾による「屈折」(inflection) が指小辞による「派生」(derivation) よりも先行している。しかし、これは世界の諸言語を鳥瞰^{ちようかん}して45の普遍性を抽出した Greenberg (1963: 93) の「普遍性 28」で知られる「派生後屈折の原則」('inflection outside derivation' principle) に反している。

3-4-2. イディッシュ語とルクセンブルク語の *(-i)er/-im* 型複数形と指小形

「接中辞化」(infixation) とも見える(37)の変則的語形は、イディッシュ語にも見られる。次例では複数形語尾 *-er/-im* (ヘブライ語・アラム語からの子

音で終わる借用語) が指小辞複数形 -lex より先に付加されている。

- (38) イ ① kind 子供—複数 kinder—指小形複数 kinder^{とげ}lex 小さな子供たち
 dorn 棘—derner—dernerlex 小さな棘
 ② talmid 生徒—talmid^{とげ}im—talmid^{とげ}imlex 小さな生徒たち
 guf 体—guf^{とげ}im—guf^{とげ}imlex 小さな体 (Perlmutter 1988: 80)

これとは別の発達として、西中部ドイツ語モーゼルフランケン方言も挙げられる (Chapman 1996)。なかでもルクセンブルク語では、指小辞 -chen と名詞がともに語尾 -er を伴う (Schanen 2004: 148, 155; Braun et al. 2005: 80, Schanen/Zimmer 2012: 99)⁴²。ドイツ語では、(37) の変則例以外はゼロ語尾である (ル Meedchen — Meeder^{とげ}cher 女の子 ↔ ド Mädchen — Mädchen-^{とげ})。

- (39) ル 指小形：単数 Kännchen/Këndchen—複数 Känn^{とげ}ercher 小さな子供
 (← Kand — Kanner 子供)
 Päerdchen — Päerder^{とげ}cher 小さな馬 (回転木馬) (← Päerd—
 Päerd-^{とげ})
 Hännchen—Hänn^{とげ}ercher 小さな手 (← Hand—Hänn-^{とげ})

Gürtler (1910) によれば、初期新高ドイツ語期の 16～17 世紀には、もっと広い地域で同種の指小形複数 -erchene/-ercher/-erchens/-erleins が豊富に見られた。このように、歴史言語学的には稀な孤立例とはいえない。

イディッシュ語で多数派の複数形語尾は、オランダ語などと同じく「強勢音節 + -en」と「無強勢音節 + -s」だが、この 2 つの語尾は指小形複数には現れない (Perlmutter 1988: 83)。一方、(38) の語尾 -er/-im は残りの語尾 -s/-en/-^{とげ}/^{とげ}-^{とげ}-ex と同じく少数派であり、一部の語を対象とする派生接尾辞に

⁴² /k/, /ŋ/, /ʃ/, /x/ の直後では指小辞 -elchen となり、複数形は「名詞 + -elcher」である (ル Bichel^{とげ}chen—Bichel^{とげ}cher 小さな本 (← Buch 本, ド Büch^{とげ}lein/Büchel^{とげ}chen))。

似ている。ルクセンブルク語の (39) の例も語尾 *-er* のみで、もとの名詞の複数形とは別形である。ド *Kindercher*/*Kinderlein*/イ *kinderlex*/ル *Kënnercher* では、ド *Kinder*/イ *kinder*/ル *Kënner* という語形自体、使用頻度が高い。Booij (2000: 366) は *Kinderchen* の *Kinder* を複数形ではなく、*Kind* とは別の語幹への拡張形としている。「子供」も複数形「子+ども」の再分析である。ド *Kleiderchen* のもとの複数形 *Kleider* 「服」も、英 *clothes*/オ *kleren* 「服」と同じく独立の語として固定し、ド *Kleid* 「ドレス」/英 *cloth* 「布」/オ *kleed* (複数 *klederen*) 「テーブル掛け」とは意味がずれている。

3-4-3. 内在屈折と文脈屈折

はたして「複数形は屈折、指小形は派生」と言い切れるだろうか。ド *Das Kind schläft*. 「子供は寝ている」↔*Die Kinder schlafen*. 「子供たちは寝ている」という文は、「単数—複数」のペアだが、*Kind*—*Kinder* 「子供」では名詞に意味的情報が加わるのに対して、*das*—*die* (定冠詞), *schläft*—*schlafen* 「眠る」は一致による統語的なチェックにすぎない。形態論研究で著名なオランダのボーイ (Geert Booij) は、前者を「内在屈折」(*inherent inflection*/オ *inherente flexie*)、後者を「文脈屈折」(*contextual inflection*/オ *contextuele flexie*) と呼んでいる (Booij 2019²: 15-17, 80-82; Booij/Van Santen 1998²: 84, 89)。

ゲルマン諸語の名詞複数形の形成は、基本的に内在屈折とは言っても、種々の語尾と語彙的意味に依存している。すべての名詞には及ばず、複数形だけの語や単数形と意味の差が生じる語もある。前章で述べたように、歴史言語学的に複数形語尾の多くは語幹形成接尾辞、つまり派生接尾辞の屈折接辞への転用だった。旧語幹が捨象され、音韻規則に移行する中で、複数形の語彙化も進んだ。屈折による変化形は同一の語だが、内在屈折としての複数形の形成には、別の語を生み出す派生と共通点がある。

イディッシュ語の指小辞は種類が多く、指小形には「小さな」—「極端に小さく愛着がある」の2段階がある (Jacobs 2005: 162, Lockwood 1995: 51f.)。そして、ルクセンブルク語と同じく、頻繁に使用する。周辺的で固定した複数形が指小形の入力項目になっても、不思議ではない。内在屈折の形容詞比

較級も、立派に動詞派生の入力項目になる（ド groß 大きい—*größer* より大きい→ *vergrößern* 拡大する）。1 語内の変化形に収まる屈折と別の語を生み出す派生は、本来、別の範疇だが、その一部はときには連続体として相互に乗り入れながら機能することがあると言える。

図表 1：現代ゲルマン諸語の名詞の性

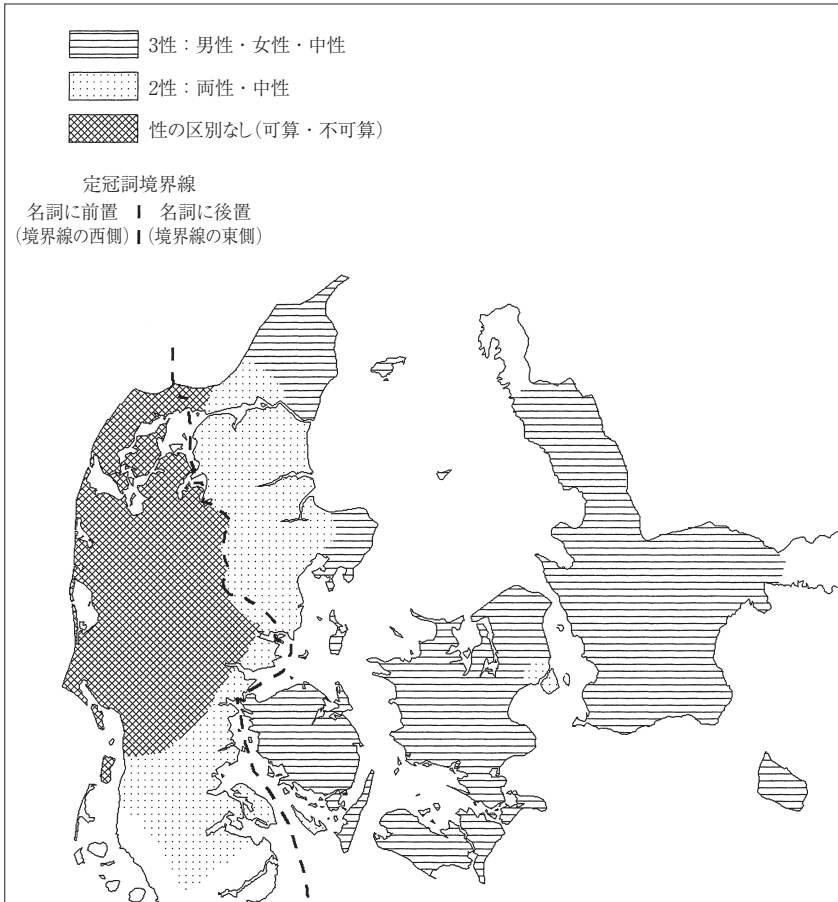
性	定冠詞(単/複)	不定冠詞(単)	3人称代名詞(単/複)
ア 3(男・女・中)	3/3	Ø [= なし]	3/3(文法性)
フェ 3(男・女・中)	3/3	3/3(単/複)	3/3(文法性)
エル 3(男・女・中)	3/3	3	3/3(文法性)
ニュ 3(男・女・中)	3/2	3	3/Ø(文法性)
ド 3(男・女・中)	3/Ø	3	3/Ø(文法性)
ル 3(男・女・中)	3/Ø	3	3/Ø(文法性)
ペ 3(男・女・中)	3/Ø	3	3/Ø(文法性)
フェ 3(男・女・中)	3/Ø	3	3/Ø(文法性)
ベ 3(男・女・中)	3/Ø	3	3/Ø(文法性)
ザ 3(男・女・中)	3/Ø	3	3/Ø(文法性)
メ 3(男・女・中)	3/Ø	3	3/Ø(文法性)
イ 3(男・女・中)	3/Ø	1	3/Ø(文法性)
オ 2(両・中：北部)	2/Ø	Ø	2 + 1/Ø(文法性(男・中) + 自然性(女性)) ⁴³
3(男・女・中：南部)	2/Ø	Ø	3/Ø(文法性)
ブ 3(男・女・中：革新的)	3/2	3	2：2/Ø(文法性：自然性) ⁴⁴
2(両・中：保守的)	2/Ø	2	2：2/Ø(文法性：自然性)
ス 2(両・中)	2/2	2	2：2/Ø(文法性：自然性)
デ 2(両・中)	2/Ø	2	2：2/Ø(文法性：自然性)
西フ 2(両・中)	2/Ø	Ø	3/Ø(自然性)
フェリ・エム 2(男・非男)	2/Ø	Ø	3/Ø(自然性)
西ユ Ø	Ø/Ø	Ø	3/Ø(自然性)
[指示代名詞：2：2/Ø(可算・不可算)]			
英 Ø	Ø/Ø	Ø	3/Ø(自然性)
フ7 Ø	Ø/Ø	Ø	3/Ø(自然性)

⁴³ オランダを中心とする北部のオランダ語は、両・中性の2性、3人称代名詞との照応は単数で「両性名詞—男性形 hij」/「中性名詞—中性形 het」/「自然性の女性名詞—女性形 zij」。

ベルギーオランダ語(南オランダ語、いわゆるフラマン語)は、男・女・中性の3性、3人称代名詞との照応は単数で「男性名詞—男性形 hij」/「女性名詞—女性形 zij」/「中性名詞—中性形 het」。

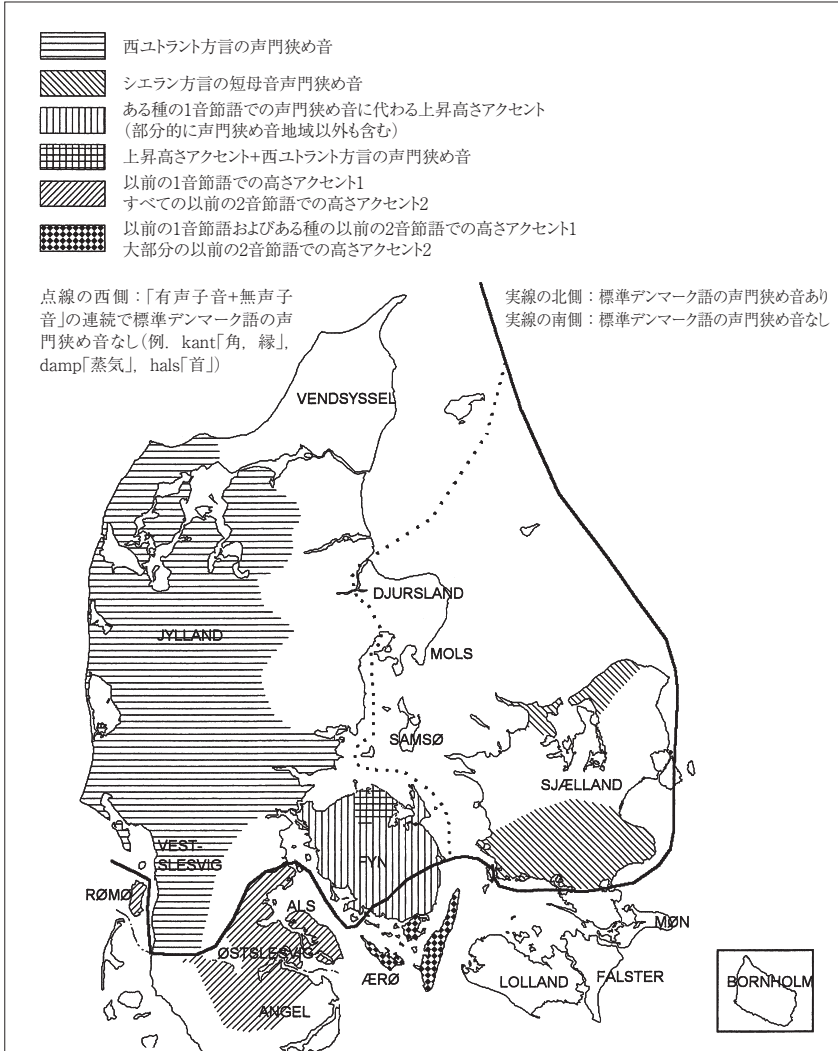
⁴⁴ ノルウェー語の独自性を意識した革新的なブークモールは、男・女・中性の3性、定冠詞3種類、不定冠詞は男/中・女性の2種類。保守的なブークモールは、デンマーク語と同じく両・中性の2性、定冠詞2種類、不定冠詞1種類。

図表2 北ゲルマン語の名詞の性と定冠詞境界線



(清水 (2012b : 98) 変更)

図表3 北ゲルマン語の声門狭め音 (デ stod) と高さアクセント



(清水 (2012b : 99) 変更)

補説 主要な音韻法則：印欧祖語からゲルマン祖語へ

ゲルマン祖語が印欧祖語から分岐した際に、次の主要な音韻変化が起こったと推定されている。古高ド/古ザë（ゲルマン祖語古来のe）に注意。

A) 語頭アクセント (initial accent)

音節の位置から自由なアクセント（ラ Rōma—Rōmānus—Rōmānōrum—Rōmānōrūmque）が語頭音節に強さアクセント（強勢 stress）として固定された。この現象は、「グリムの法則」（Grimm's law, 第一次子音推移 first consonant shift）に伴う「ヴェアナーの法則」（Verner's law）⁴⁵以降の時代に起こった。その結果、無強勢の語末音節が弱まり、文法情報を担う語尾が摩滅する傾向が強まった。古ゲルマン語詩では、語頭子音の反復による「頭韻」（alliteration）が発達した。アイスランド語では頭韻詩の伝統が近代以降も継続し、20世紀の第二次大戦頃まで主流だった（清水 2009: 249-274）。

B) 母音の変化：ゲ *a < 印欧 *o；ゲ *ō < 印欧 *ā

A)の結果、ゲルマン祖語の短母音は *a, *e, *i, *u の4母音組織になった。*oはその後の音韻変化で誕生した（例「a-ウムラウト」（ド a-Umlaut）による先行音節の母音 u の広母音化（低舌化 u > o/_a）：古高ド giholfan 過去分詞 ← helfan 助ける（ド geholfen ← helfen）↔ ゴ hulpan ← hilpan）。ドイツ語のウムラウト ö（ド Umlaut-ö, ö < o/_i）は後代の類推による。o は直後の音節の a の影響で生じ、o の直後の音節に i は現れなかったからである。

C) ゲルマン語語末音の法則（ド Germanische Auslautsgesetze）

次の複雑な語末音消失による音韻変化の総称。Meisen (1968²: 2-6) に従って、ドイツ語を中心にまとめる。

⁴⁵ 提唱者 Karl A. Verner (1846-96) はデンマーク人なので、デンマーク語の発音に従って「ヴェアナー」と転写する。

C-1) 母音語末音の法則 (ド Vokalische Auslautsgesetze)

* 鋭アクセント (ド Stoßton, akuiertter Ton, 「ˑ」): アクセント部分 1 箇所
(ド eingipflig) の短母音, 長母音, 二重母音

曲アクセント (ド Schleifton, 「˘」): アクセント部分 2 箇所 (ド zweigipflig)
の長母音, 二重母音

* 量的短縮: 3 モーラ母音 > 2 モーラ母音, 2 モーラ母音 > 1 モーラ母音,
1 モーラ母音 > Ø (=ゼロ, 以下同様)

* 語末音の種類

I. 母音語末音: 絶対語末音 (ド absoluter/freier Auslaut)

II. 母音 + 単子音語末音 (ド einfach gedeckter Auslaut): 子音が母音の変化
に影響

III. 母音 + 複子音語末音 (ド mehrfach gedeckter Auslaut): 子音が母音の変
化に影響

1. 多音節語の短母音

(1) 印欧 *a/o > ゲ *a > ゲ Ø; 印欧 *e > ゲ Ø (I, II 参照)

印欧 * uoida (ギ oīda (oīda)) > ゴ wait/古ザ wēt/古高ド weiz (ド [ich]
weiß)

印欧 *dhogeso > ゴ dagis/古ザ dages/古高ド tages (ド [des] Tages)
ゲ *kuningaz > 古ザ cuning, 古高ド chuning (ド König)

印欧 *dhogos > ゴ dags/古ザ dag/古高ド tag (ド [der] Tag)

印欧 * uōide (ギ oīde (oīde)) > ゴ wait/古ザ wēt/古高ド weiz (ド [er]
weiß)

印欧 *ghostejes > ゴ gasteis, 古ザ/古高ド gesti (ド Gäste)

(2) 印欧 *i > ① ゲ *i > 古ゲ *i (2 音節語で短音節の後)

② ゲ * Ø > 古ゲ * Ø (2 音節語で長音節の後; 3 音節語)

印欧 *u, ī , r , m , n > ③ ゲ *u > 古ゲ *i (2 音節語で短音節の後)

④ ゲ * Ø > 古ゲ * Ø (2 音節語で長音節の後; 3 音節語)

※注意: ゴート語では, 2 音節語について類推から不明確な場合がある。

- ① 印欧 **marī* > 古ザ/古高ト *merī* (ト Meer)
- ② ゲ **siduz* > 古ザ *sidu*/古高ト *situ* (ト Sitte)
- ③ ゲ **gastiz* > ゴ *gasts*, 古ザ/古高ト *gast* (ト Gast)
- ④ ゲ **flōdus* > 古ザ *flōd*/古高ト *fluot* (ト Flut)
- ⑤ 印欧 **bheresi* > ゴ *bairis*, 古ザ/古高ト *biris* (ト [du] trägst)
印欧 **bheronti* > ゴ *baírand*, 古ザ *bērad*, 古高ト *bērant* (ト [sie] tragen)
- ⑥ 印欧 **kanon-m* > ゲ **hanan-u(n)* > ゴ *hanan*, 古ザ/古高ト *hanon* (ト [den] Hahn)
比較: ゴ *hanin*, 古ザ *hanen*, 古高ト *hanin*, (ト [dem] Hahn, ギ *poiméni*(ποιμένι), [dem] Hirten)

2. 多音節語の長母音

(1) 長母音は多音節語で一般に保持された

- ① ゴ 長母音 + s/z : 長母音保持
gibōs (ト [die] Gaben), *nasidēs* (ト [du] rettetest)
↔ *nasida* (ト [ich/er] rettete)
- ② 古高ト: 本来の曲アクセント長母音 + Ø (< s/z) : 長母音保持
印欧 **ghebhāz* > ゲ **gebōz* > 古高ト *gēbā* (ト [die] Gaben)
- ③ 西ゲ: 鋭アクセント長母音 + s : 長母音 > 短母音
ゴ *wileis* ↔ 古ザ/古高ト *wilis*, *wīli* (*wīle*) (ト [du] willst)
個々の長母音は以下のとおり。

(2) 印欧 **ē* (鋭アクセント長母音) > ゲ **a* : 短母音化 (ゴート語のみ例証)

印欧 **dhogē* > ゴ *daga* (ト [dem] Tage)
↔ 印欧 **ē* (曲アクセント長母音) > ゴ *ē* : 長母音保持 (その他は *a* に短母音化)

(3) ゲ **ō* (鋭アクセント長母音, 絶対語末音) > ゴ *a*

↔ 西ゲ *u* (短音節の後で保持)
↔ 西ゲ Ø (長音節の後で消失—ただし, 広範に類推で *u* を保持)

ギ férō(φέρω) = ゴ baíra ↔ 古ザ/古高ト biru (ト [ich] trage)

類推：古ザ bindu, 古高ト bintu (比較：ゴ binda, ト [ich] binde)

- (4) 印欧 *ām (鋭アクセント長母音 + 鼻音) > ゲ *ō(n) > ゴ/古ザ/古高ト a
 ゴ giba, 古ザ gēba, 古高ト gēba (ト [die] Gabe, ō- 語幹単数対格)
 古ザ tunga, 古高ト zunga (ト [die] Zunge, n- 語幹単数主格)

印欧 *ōm > ゴ/古ザ/古高ト a

ゴ nasida, 古ザ nerida, 古高ト nerita (ト [ich] rettete, 弱変化動詞 1 人称単数過去)

- (5) 印欧 *ō (曲アクセント長母音) > ゴ ō ↔ 古ザ/古高ト o (すべての位置)
 印欧 *ōm > ゴ gibō ↔ 古ザ gēbo/gēbono, 古高ト gēbōno (ト [der] Gaben, ō- 語幹複数属格)
 古ザ dago, 古高ト tago (ト [der] Tage, a- 語幹複数属格)
 印欧 *ō > 古ザ/古高ト hano (ト Hahn, n- 語幹単数主格)

3. 短二重母音 (ト Kurzdiphthong)

- (1) 印欧 *ai (鋭アクセント短二重母音) > ゲ *a
 ギ férētai(φέρεται) = ゴ baírada (ト [er] wird getragen, 中動態 (ト Medio-Passivum) — ゴート語のみ)
- (2) 印欧 *āi/*ōi (曲アクセント短二重母音) > ゴ ai ↔ 西ゲ ē (古高ト ē/絶対語末音 e) (> e)
 印欧 *behrois/bheroit > ゴ baírais/báirai, 古ザ bēres/bēre, 古高ト bērēs/bēre (ト [du] mögest/[er] möge tragen, 希求法 2/3 人称単数)
- (3) 印欧 *aū/*oū (曲アクセント短二重母音) > ゲ *āu > ゴ au ↔ 西ゲ ō (> 古高ト ō) > 古ザ o
 印欧 *ōus (曲アクセント短二重母音) > ゴ sunaus, 古ザ suno, 古高ト *sunō (ト [des] Sohnes, u- 語幹単数属格) (例証：古高ト fridō, ト [des] Friedens)

4. 長二重母音 (ド Langdiphthong)

- (1) 印欧 *āi/*ēi/*ēu: 最初の成分が短音化 (ゴート語は最初の成分がつねに a, 古ザクセン語と古高ドイツ語は一部で異なる)

印欧 *āi > ゴ *gibai* ↔ 古ザ/古高ド *gēbe* (ド [der] Gabe, ô- 語幹単数与格—具格で置換)

印欧 *ēi > ゴ *anstai* ↔ 古ザ *ansti*, 古高ド *ensti* (ド [der] Gunst, i- 語幹単数与格)

印欧 *ēu > ゴ *sunau* ↔ 古ザ *sunu*, 古高ド *suniu* (別の母音交替系列 *īu の ī が短音化, ド [dem] Sohn, u- 語幹単数与格)

C-2) 子音語末音の法則 (ド Konsonantische Auslautsgesetze)

1. 歯音閉鎖音 (多音節語の絶対語末音)

印欧 *t > ゲ *Ø

印欧 *nepōt- (ド Abkömmling, Enkel) > 古ザ *nēvo*/古高ド *nēfo* (ド Neffe, Enkel)

印欧 *bheroit > ゴ *bairai*, 古ザ/古高ド *bēre* (ド [er] möge tragen, 希求法 3 人称単数)

ラ *velit* = ゴ/古ザ/古高ド *wili* (ド [er] möge wollen, 希求法 3 人称単数)

印欧 *bhērnt (ラ *ferēbant*) > ゴ *bērun*, 古ザ/古高ド *bārun* (ド [sie] trugen, 直説法 3 人称過去複数)

2. 鼻音

印欧 *(母音+) m > ゲ *(母音+) n > 古ゲ Ø

a) 男・女性単数対格 (すべての種類の名詞変化)

印欧 *om (古ラ *servom*) > ゲ *an > *Ø: ゴ/ザ *dag*, 古高ド *tag* (ド [den] Tag)

印欧 *im (ラ *sitim*) > ゲ *Ø: ゴ/古ザ/古高ド *anst* (ド [die] Gunst)

印欧 *em (ラ *frārem*) > ゲ *Ø: ゴ *brōpar*, 古ザ *bröder*, 古高ド

bruoder (ト [den] Bruder)

印欧 *am > ゲ *ön > *a : ゴ giba, 古ザ gēba, 古高ト gēba (ト [die] Gabe)

印欧 *um (ラ fructum) > *u

ゴ/古ザ/古高ト sunu (ト [den] Sohn)

b) a- 語幹中性単数主・対・呼格

ラ iugum = ゴ/古ザ juk, 古高ト joch (ト [das] Joch)

c) 複数属格 (すべての種類の名詞変化)

印欧 *ēm/*ōm (ラ mātrum)

> ゴ dagē, 古ザ dago, 古高ト tago (ト [der] Tage)

ゴ gibō, 古ザ gēbo (古ザ gēbono/古高ト gēbōno は弱変化形の影響, ト [der] Gaben)

ゴ anstē, 古ザ enstie, 古高ト ensteo (ト [der] Günte)

d) n- 語幹単数主格

ゴ hana, 古ザ/古高ト hano (比較: ギ hēgemōn (ἡγεμών), ト Führer)

e) 印欧 *mi- 動詞 1 人称単数過去

古ザ dēda, 古高ト tēta (ト [ich] tat)

3. 有声音 z/z/

印欧 *s/s/> ゲ *z/z/ (ヴェアナの法則) > ゴ s/s/ (語末音の無声化)

↔ 西ゲ *Ø (多音節語) / *r (単音節語で短母音の後)

a) 単数主格

ゲ *dagaz > ゴ dags, 古ザ dag, 古高ト tag (ト [der] Tag)

ゲ *gastiz > ゴ gasts, 古ザ/古高ト gast (ト [der] Gast)

b) 単数属格

ゲ *sunauz > ゴ sunaus, 古高ト *sunō (ト [des] Sohnes) (例証: 古高ト fridō, ト [des] Friedens)

c) 複数主格

ゲ *rūnōz > ゴ rūnōs, 古ザ rūna, 古高ト rūnā (ト [die] Geheimnisse,

Runen)

d) 希求法 2 人称単数

ゲ *beraiz > ゴ baírais, 古英 bēre (ト [du] mögest tragen)
(古ザ bēres, 古高ト bërēs の -s については不詳)

4. 語末音群 ns

印欧 *ns > ゴ ns ↔ 西ゲ Ø

ゴ gastin**s** (比較: ギ pólin**s** (πόλινς), ト [die] Städte), 古ザ/古高ト
gesti (ト [die] Gäste)

ゴ dagan**s** 古ザ daga, 古高ト taga/tagā (ト [die] Tage)

ゴ sunun**s** (ト [die] Söhne, 古ザ/古高ト u- 語幹の対応語形なし), 古高
ト situ (ト [die] Sitten)

5. 語末音群 mz

印欧 *mes/*mos > ゲ *miz > maz > ゲ *mz > ゴ/西ゲ m

ゲ *gastim(i)**z** > ゴ gastim, 古高ト gestim (ト [den] Gästen)

印欧 *bheromes/*bheromos (ラ ferim**us**) > ゲ *beramiz/*beramaz > ゴ
baíram, 古高ト bërām, -ēm, -en (ト [wir] tragen)

参考文献

- Arfsten, Antje/Tadsen, Christina (2007) *Friesischer Sprachkurs. Fering*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
- Århammar, Nils (1971/75) *Die Sprachen der Insel Föhr. Föhrer Friesisch (Fering) und Plattdeutsch*. Münsterdorf: Hansen & Hansen.
- Århammar, Nils (1975²) *Die Syltringer Sprache. Die Syltringer Literatur..* Münsterdorf: Hansen & Hansen.
- Askedal, John Ole (1973) *Neutrum Plural mit persönlichem Bezug im Deutschen*. Trondheim/Oslo/Bergen/Tromsø: Universitetsforlaget.
- Askedal, John Ole (1994) Norwegian. In: König/Van der Auwera (eds.), 219–270.

- Bammesberger, Alfred (1990) *Die Morphologie des urgermanischen Nomens*. Heidelberg: Winter.
- Barnes, Michael P./Weyhe, Eivind (1994) Faroese. In: König/Van der Auwera (eds.), 190–218.
- Beilstein-Schauelberger, Ann (2007³) *Züritüütsch Schweizerdeutsch. Ein Lehrmittel für Fremdsprachige*. Greifensee: Dr. Ann Beilstein-Schauelberger.
- Besch, Werner/Knoop, Ulrich/Putschke, Wolfgang/Wiegand, Herbert Ernst (Hrsg.) (1983) *Dialektologie. HSK Bd. 1-2*. Berlin/New York: De Gruyter.
- Booij, Geert (1998) Phonological Output Constraints in Morphology. In: Kehrein, Wolfgang/Wiese, Richard (eds.) *Phonology and Morphology in the Germanic Languages. (Linguistische Arbeiten 386)*. Tübingen: Niemeyer.
- Booij, Geert (2000) Inflection and Derivation. In: Booij, Geert et al. (eds.) *Morphologie/Morphology. Ein internationales Handbuch zur Flexion und Wortbildung/An International Handbook on Inflection and Word-Formation. HSK 17. 1*. Berlin/New York: De Gruyter. 360–369.
- Booij, Geert (2019²) *The Morphology of Dutch*. Oxford: Oxford University Press.
- Booij, Geert/Van Santen, Ariane (1998³) *Morfologie. De woordstructuur van het Nederlands*. Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Borchert, Mina/Århammar, Nils/Århammar, Ritva (1987) *Wi lear Halunder. Helgoländisches Lehrbuch*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
- Boutkan, Dirk (1995) *The Germanic 'Auslautgesetze'*. Amsterdam/Atlanta, GA: Rodopi.
- Braun, Josy/Johanns-Schlechter, Marianne/Kauffmann-Frantz, Josée/Losch, Henri/Magnette-Barthel, Geneviève. 2005. *Grammaire de la langue luxembourgeoise*. Mamer: Imprimerie Graphic Press/Ministère de l'Éducation nationale et de la Formation professionnelle.
- Braune, Wilhelm/Heidermanns, Frank (2018¹⁶) *Althochdeutsche Grammatik I*. Berlin/Boston: De Gruyter.
- Braune, Wilhelm/Reiffenstein, Ingo (2004¹⁵) *Althochdeutsche Grammatik I. Laut- und Formenlehre*. Tübingen: Niemeyer.
- Chapman, Carol (1996) Diminutive Plural Infixation and the “West Franconian” Problem. In: Fisiak, Jacek (ed.) *Linguistic Reconstruction and Typology*. Berlin/New York: De Gruyter. 73–88.
- Diderichsen, Paul (1976³) *Elementær dansk grammatik*. København: Gyldendal.
- Dingeldein, Heinrich J. (1983) Spezielle Pluralbildungen in den deutschen Dialekten. In: Besch et al. (Hrsg.) 1196–1202.
- Donaldson, B. C. (1983) *Dutch. A Linguistic History of Holland and Belgium*. Leiden: Nijhoff.

- Donaldson, Bruce C. (1993) *A Grammar of Afrikaans*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Donaldson, Bruce (1997) *Dutch. A Comprehensive Grammar*. London/New York: Routledge.
- Duden (1998⁶) *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Duden (2009⁶) *Die Grammatik*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Duke, Janet (2009) *The Development of Gender as a Grammatical Category. Five Case Studies from the Germanic Languages*. Heidelberg: Winter.
- Duke, Janet (2010) Gender Reduction and Loss in Germanic. The Scandinavian, Dutch, and Afrikaans Case Studies. In: Dammel, Antje/Kürschner, Sebastian/Nübling, Damaris (Hrsg.) *Kontrastive germanistische Linguistik. Teilband 2*. Hildesheim/Zürich/New York: Olms. 643–672.
- Ebert, H. Karen (1998) Genussynekretismus im Nordseeraum. Die Resistenz des Fering. In: Boeder, Winfried/Schroeder, Christoph/Wagner, Karl Heinz/Wildgen, Wolfgang (Hrsg.) *Sprache in Raum und Zeit. In memoriam Johannes Bechert. Bd. 2. Beiträge zur empirischen Sprachwissenschaft*. Tübingen: Narr. 269–282.
- Enger, Hans-Olav (2003) Pannekakesetninger er semantisk kongruens. *Maal og Minne* 1. 81–105.
- Faarlund, Jan Terje/Lie, Sven/Vannebo, Kjell Ivar (2002⁵) *Norsk referansegrammatikk*. Oslo: Universitetsforlaget.
- Fulk, R. D. (2018) *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Gallmann, Heinz (2015³) *Zürichdeutsches Wörterbuch*. Zürich: Verlag Neue Zürcher Zeitung.
- Greenberg, Joseph, H. (1963) Some Universals of Grammar with particular Reference to the Order of meaningful Elements. In: Greenberg, Joseph H. (ed.) *Universals of Language*. Cambridge: The MIT Press. 58–91.
- Groenke, Ulrich (1998) *Die Sprachenlandschaft Skandinaviens*. Berlin: Weidler.
- Gürtler, Hans (1910) Anomale Pluralbildungen der Diminutiva im Frühneuhochdeutschen. *Zeitschrift für deutsche Wortforschung*. Bd. 12. 135–138.
- Haberland, Hartmut (1994) Danish. In: Köning/Van der Auwera (eds.). 313–348.
- Haugen, Einar (1982) *Scandinavian Language Structures. A Comparative Historical Survey*. Tübingen: Niemeyer.
- Hoekstra, Jarich (1996) Transitive Pronouns and Gender Syncretism in Fering-Öömrang (North Frisian). *Nowele* 27. 45–66.

- Hoekstra, Jarich (2001) Comparative Aspects of Frisian Morphology and Syntax. In: Munske (Hrsg.). 775–786.
- Hoekstra, Jarich (2011) Meervoudsvorming in het Westerlauwers Fries en het Nederlands (en patroniemvorming in het Noord-Fries). *Taal en Tongval*. Vol. 63. Nr. 2. 281–301.
- Hovdenak, Marit/Killingbergtrø, Laurits/Lauvhjell, Arne/Nordlie, Sigurd/Rommetveit, Magne/Worren, Dagfinn (red.) (1986) *Nynorskordboka. Definisjons- og rettskrivingsordbok*. Oslo/Det Norske Samlaget.
- Jacobs, Neil G. (2005) *Yiddish. A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- König, Ekkehard/Van der Auwera, Johan (eds.). (1994) *The Germanic Languages*. London/New York: Routledge.
- Krahe, Hans/Meid, Wolfgang (1969^a) *Germanische Sprachwissenschaft I. Einleitung und Lautlehre*. Berlin: De Gruyter.
- Krahe, Hans/Meid, Wolfgang (1969^b) *Germanische Sprachwissenschaft II. Formenlehre*. Berlin: De Gruyter.
- Krause, Wolfgang (1968³). *Handbuch des Gotischen*. München: Beck.
- Kress, Bruno (1982) *Isländische Grammatik*. Leipzig/München: VEB Verlag Enzyklopädie/Hueber.
- Kroonen, Guus (2013) *Etymological Dictionary of Proto-Germanic*. Leiden/Boston: Brill.
- Kruisinga, E. (1932⁵) *A Handbook of Present-Day English. Part II. English Accidence and Syntax 2*. Groningen: P. Noordhoff.
- Kürschner, Sebastian (2008) *Deklinationenklassen-Wandel. Eine diachron-kontrastive Studie zur Entwicklung der Pluralallomorphie im Deutschen, Niederländischen, Schwedischen und Dänischen*. Berlin/New York: De Gruyter.
- Kusmenko, Jurij K. (2000) Entwicklung des Genussystems in den skandinavischen Sprachen. In: Paul, Fritz (Hrsg.) *Arbeiten zur Skandinavistik*. Frankfurt am Main: Lang. 469–478.
- Lass, Roger (1990) How to Do Things with Junk. Exaptation in Language Evolution. *Journal of Linguistics* 26: 79–102.
- Lockwood, W. B. (1995) *Lehrbuch der modernen jiddischen Sprache*. Hamburg: Buske.
- Lundskær-Nielsen, Tom/Holmes, Philip (eds.) (2010²) *Danish. A Comprehensive Grammar*. London/New York: Routledge.
- Meisen, Karl (1968³) *Altdeutsche Grammatik II. Formenlehre*. Stuttgart: Metzler.
- Mettke, Heinz (1983) *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
- Munske, Horst Haider (Hrsg.) *Handbuch des Friesischen/Handbook of Frisian Studies*.

- Tübingen: Niemeyer.
- Newton, G. (1990) Central Franconian. In: Russ (ed.), 136-209.
- Nielsen, Niels Åge (1959) *De jyske dialekter*. København: Gyldendal.
- Nijen Twilhaar, Jan (1992) Deflexie en genusverlies. *Nieuwe taalgids* 85. 147-160.
- Noreen, Adolf (1970⁵) *Altnordische Grammatik I. Altisländische und altnorwegische Grammatik (Laut- und Formenlehre) unter Berücksichtigung des Urnordischen*. Halle: Niemeyer.
- Orel, Vladimir (2003) *A Handbook of Germanic Etymology*. Leiden/Boston: Brill.
- Paddock, Harold (1991) The Actuation Problem for Gender Change in Wessex versus Newfoundland. In: Trudgill, Peter/Chambers, J. K. (eds.) *Dialects of English. Studies in Grammatical Variation*. London/New York: Longman. 29-46.
- Perlmutter, David M. (1988) The Split Morphology Hypothesis. Evidence from Yiddish. In: Hammond, Michael/Noonan, Michael (eds.) *Theoretical Morphology*. San Diego: Academic Press. 79-100.
- Petersen, Hjalmar P./Adams, Jonathan (2009²) *Faroese. A Language Course for Beginners. Grammar*. Tórshavn: Stíðin.
- Pfeifer, Wolfgang (Hrsg.) (2004⁷) *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Quak, A./Van der Horst, J. M. (2002) *Inleiding Oudnederlands*. Leuven: Universitaire Pers Leuven.
- Ramat, Paolo (1981) *Einführung in das Germanische*. Tübingen: Niemeyer.
- Russ, Charles V. J. (ed.) (1990) *The Dialects of Modern German*. London: Routledge.
- Schanen, François (2004) *Parlons luxembourgeois*. Paris: L'Harmattan.
- Schanen, François/Zimmer, Jacqui (2012) *Lëtzebuergesch Grammaire luxembourgeoise*. Esch-sur-Alzette: EDITIONS Schortgen.
- Schobinger, Viktor (2007⁸) *Zürichdeutsche Kurzgrammatik*. Zürich: Schobinger Verlag.
- Schwink, Frederick W. (2004) *The Third Gender. Studies in the Origin and History of Germanic Grammatical Gender*. Heidelberg: Winter.
- 清水 誠 (1984) 「スウェーデン語に与えたドイツ語の影響」『東京大学教養学部附属言語文化センター紀要』4. 1-24.
- 清水 誠 (1989) 「ゲルマン語類型論の新しい展開—文法性の問題を中心に」『ドイツ語教育部会会報』35 (日本独文学会ドイツ語教育部会) 40-47.
- 清水 誠 (1992) 「北フリジア語モーリング方言 (1). 文法. V. Tams Jörgensen: *Kort språkeliir foon dät mooringer frasch* 訳注. 『北海道大学文学部紀要 40-3. 65-162.
- 清水 誠 (訳) (1995) 「K. リングゴー著：デンマーク語方言概説」(K. Ringgaard (1973³) *Danske dialekter. En kortfattet oversigt*. København: Akademisk Forlag.) 『ノルデン』

第 32 号. 31-105.

清水 誠 (2001) 「チャレンジコーナー」『月刊言語 12 月号 第 30 巻第 13 号』大修館.
172-177.

清水 誠 (2006) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学
出版会.

清水 誠 (2009) 『北欧アイスランド文学の歩み—白夜と氷河の国の六世紀』現代図書.

清水 誠 (2010) 「オランダ語研究の歴史と言語規範の形成」北海道大学大学院文学研究科
言語情報学講座編『言語研究の諸相 研究の最前線』北海道大学出版会. 183-252.

清水 誠 (2012a) 『ゲルマン語入門』三省堂.

清水 誠 (2012b) 「ゲルマン語の歴史と構造 (5) —現代ゲルマン諸語」『北海道大学文学
研究院紀要』137 号. 23-83.

清水 誠 (2019a) 「ドイツ語から見たゲルマン語一名詞の性, 格の階層と文法関係」『北海
道大学文学研究院紀要』158 号. 37-76.

清水 誠 (2019b) 『オランダ語の基本』三修社.

清水 誠 (2020) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (2) —属格と所有表現」『北海道大学文学
研究院紀要』160 号. 37-96.

Siemund, Peter (2013) *Varieties of English. A Typological Approach*. Cambridge:
Cambridge University Press.

Streitberg, Wilhelm (1920^{5/6}) *Gotisches Elementarbuch*. Heidelberg: Winter.

菅田茂昭 (2019) 『ロマンス言語学概論』早稲田大学出版部.

寺澤芳雄 (編) (1997) 『英語語源辞典』研究社.

Thomson, Colin D. (1987) *Íslensk Beygingafræði/Isländische Formenlehre/ Icelandic
Inflections*. Hamburg: Buske.

Thráinsson, Höskuldur (1994) Icelandic. In: König/Van der Auwera (eds.). 142-189.

Tiesema, H. D. (1969³) *Abriss der historischen Laut- und Formenlehre des Deutschen*.
Vaassen: Uitgeverij Van Walraven.

Trudgill, Peter (1999³) *The Dialects of England*. Oxford/Malden: Blackwell.

角田太作 (2009²) 『世界の言語と日本語』くろしお出版.

Van Haeringen, C. B. (1962^{2a} (1947)) *De meerwoudsvorming in het Nederlands*. 再録:
Neerlandica. Verspreide opstellen door C. B. Van Haeringen. Den Haag: Daamen N. V.
186-209.

Van Kerckvoorde, Colette M. (1993) *An Introduction to Middle Dutch*. Berlin/New York:
Mouton de Gruyter.

Van Loey, A. (1970⁶) *Schönfeld's historische grammatica van het Nederlands. Klankleer,
vormleer, woordvorming*. Zutphen: Thieme.

Walker, Alastair G. H./Wilts, Ommo (2001) Die nordfriesischen Mundarten. In: Munske

(Hrsg.). 284-304.

Weber, Albert (1987³) *Zürichdeutsche Grammatik. Ein Wegweiser zur guten Mundart.*
Zürich: Verlag Hans Rohr.

Wessén, Elias (1965) *Svensk språkhistoria. I. Ljudlära och ordböjningslära.* Stockholm:
Almqvist & Wiksell.

Wright, Joseph (1905) *English Dialect Grammar.* Oxford/Edinburgh/Glasgow/New York/
Toronto: Henry Frowde.